

セリーヌ『城から城』における政治家ラヴァルの人物像

早川文敏

序

『城から城』*D'un château l'autre*は1957年に出版され、第二次世界大戦後のセリーヌの文学的成功を確実にした作品である。小説中では、舞台は第二次世界大戦末期のジクマリンゲンとされているが、これは対独協力政策をうたっていたヴィシー政府の閣僚たち、および同じような政治的主張を持っていた作家、ジャーナリスト、官僚、反レジスタンス軍の人々とその家族らが連合軍の進軍を恐れて避難していた、南ドイツの田舎町ジクマリンゲンのことである。それまで『死体派』*L'École des cadavres*、『虫けらどもをひねりつぶせ』*Bagatelles pour un massacre*といった政治的パンフレットなどで人種差別的発言をしたり、対独協力思想や、ドイツの政策への共感を表明したりしていたセリーヌは、ノルマンディー上陸作戦が行われた44年6月にパリを脱出し、デンマークへ逃れようとした。しかし行政上の手続きの問題でそれがかなわず、ベルリンやバーデンバーデンなどドイツ国内を彷徨した後、このジクマリンゲンに到着し、数ヶ月滞在することになった。『城から城』はそのときの経験から生まれたものである。

この小説は彼のそれまでの小説とさまざまな点で異なる。最も特徴的な点は、多くの脚色はあるにしても、歴史的な事実、歴史に残されてしかるべき事実を描いているという点だ。『夜の果ての旅』*Voyage au bout de la nuit*では兵役などの経験、『なしくずしの死』*Mort à crédit*では少年期の思い出、『またの日の夢物語』*Féerie pour une autre fois*ではデンマークでの投獄などというように、セリーヌはそれまでも個人的な体験を小説の題材にしてきている。『城から城』も確かに彼個人の視点から書かれており、作者の分身たる主人公が一人称で語るという点ではそれまでの小説と同じだ。しかし実在した多くの著名な人物、特にかつての国家元首フィリップ・ペタンや首相のピエール・ラヴァルといった政治家をそのままの名前で小説に登場させ、それによって読者の多くが小説内容を現実のこととして受け入れやすくなっているという点は異なる。登場人物を特定のモデルから作った例はこれまでもよくあった（発明家クルシアル・デ・ペレールがラウル・マルキを、宝石商ゴルロージュがヴァグネルをモデルとしたものであったように）が、ここでは誰もが知っている著名人を扱っているのである。それに作者の分身である主人公も、それまでの小説ではフェルディナンという作者のファースト・ネームで呼ばれていたのに対し、ここでは小説家、著名人としての作者との近さをより強く感じさせるようにセリーヌと呼ばれてお

り、この点も注目せねばならない。また作中でセリーヌは、この作品は小説ではなく年代記だと強調しているが、このことから『城から城』で描かれているのは架空のエピソードだとは思わせたくなないと考えているようである。

『城から城』の中で描かれる人物の中でも、ヴィシー政府の首相を務めたピエール・ラヴァルは非常に興味深い。第一次世界大戦の英雄にしてヴィシー政府では国家元首であったペタンとともに、首相ラヴァルは他の登場人物に比べて現実世界での知名度は格段に高く、さらに小説中ではペタンよりも詳細に語られ、セリーヌと親密であった印象を与えている。彼に関するおそらく最も重要なエピソードは、ジークマリンゲンの駅で暴動が発生しそうになったところを収めるというもので、ここではラヴァルがある種の英雄であるかのごとく語られており、彼に対するセリーヌの思い入れが強く感じられる。

ただし、そのような描き方に対していくつかの疑問が生じるのも確かだ。まずラヴァルは、フランスがドイツに敗退した後、対独協力政策を最も積極的に進めた人物である。そのため終戦後は裁判で有罪判決を受け、1945年のうちに即座に処刑されている。このような人物を好意的に描くのは一般読者の反感を買うおそれがあったはずであり、特に小説中での彼の扱いは作者に都合が悪かったのではないかと思われる。それだけではない。アンリ・ゴダールが編集し、公表した初期の草稿の一つを見ると、ラヴァルは決定稿とは違う雰囲気を持った人物として描かれているのがわかる。この草稿が書かれた時期は明確ではないが、ゴダールによると54年の後半に『城から城』が書き始められているのは確からしいので、おそらくそのころのものと考えられる¹⁾。ラヴァルに関していくつかの記述が見られるが、それらは決定稿に比べ、作者が抱いているらしいラヴァルへの反感を強く表しているように見えるわけである。そういう点を考えると、小説創造の過程でラヴァルに対するセリーヌの考え方が変わっているのではないかと思われる。さらにセリーヌは小説以外の場、書簡やインタビューなどでもラヴァルについていろいろと言及しているが、そこでも『城から城』での扱いとは距離があるように感じられる。これはなぜなのか。

以上のように本稿では、ラヴァルという実際の人物、ラヴァルに対するセリーヌの考え、そして時代の影響などを改めて確かめながら、『城から城』におけるラヴァルの扱いから生まれる問題について考察したい。

1 英雄としてのラヴァル

『城から城』でラヴァルが主要な役割を果たすシーンは二つある。一つはジークマリンゲンの駅で暴動が起こりそうになったとき、ラヴァルが威厳をもってそれを収める場面であり、もう一つはセリーヌがラヴァルの執務室を訪ね、彼に青酸カリを与えるのと引き替えに、ある植民地の総督に任命してもらおう場面である。二つ目の場面の分析は別の場で試みるとして、ここでは駅での暴動の場面について見てみたい。

このエピソードはジークマリンゲンに滞在しているドイツ軍人フォン・ラウムニッツの夫人に

頼まれて、セリーヌがその娘を探しに駅に向かうところから始まる。町の公衆衛生を保つのは医師であるセリーヌの仕事であったらしく、そのため避難民などが多く集まる駅の管理も任されていたらしい。「駅は私の仕事に入っていた、衛生管理の面で、救護所、避難民……だからもちろん、待合室や売春も！それを見なければならなかった！……全てを！³⁾」着いてみると、ここには多くの列車が立ち往生しており、大騒ぎとなっている。特別なことがあったわけではなく、ここは「とんでもない交通の要衝³⁾」であるため、さまざまな国から来た列車が機械の整備や荷降ろしなどのために立ち止まっている。「線路の上も同じこと、次から次へと列車が来て……無限に続く車両……兵隊また兵隊、あらゆる部隊にあらゆる民族……捕虜もいる！……靴も脱いで、足を外に投げ出して……入り口に座り込み……しかも空腹で！いつだって空腹で！〔……〕モンテネグロ人も、チェコスロバキア人も、ウラーソフ軍も、バルチック・フィンランド人も、ヨーロッパ中の軍隊が混ざり合って！……27もの軍隊が！⁴⁾」さらにそのような屈強な兵隊たちと、軍用に積まれていた食料を目当てに、町の女たちが群がってゆく。「兵隊たちがピアノに群がる！……娘や母親をそれぞれの膝に乗せて！……宴は続く！〔……〕女の子たちは大喜びだ！ソーセージやイモが入った立派な軍用弁当だ！……本物の脂、本物のバター、本物の満腹！……⁵⁾」あまりに人があふれて列車が動かなくなると、ナチス突撃隊の隊員がピストルを見せながら威嚇して立ち退かせようとするが、それでもうまく行かない。しばらくするとフランスのマルゴトン使節団が到着する。政府の任務から帰ってきた彼らは国家元首ペタンがじきじきに出迎えてくれるだろうと期待していたが、会うことは当然できず、怒って混乱にさらに拍車をかける。そんな風に事態の收拾がつかなくなったとき、とうとうナチス突撃隊の一人が発砲してしまい、一人のドイツ兵がその弾に当たって死んでしまう。これをきっかけにあらゆる兵士、あらゆる市民の怒りがナチスに向けられ、まさに暴動が起きようとする。

ああ、しかしみんなまたしゃべり始めた！まわりで誰もが、がやがや言い出した！……大きな声で！非難している！……SA〔ナチス突撃隊〕是最悪の野蛮人だ！だの、もうこれまでだ！、だのストラスプールのセネガル兵よりひどい人食い人種だ！〔……〕フィフィ〔FFI、フランスのレジスタンス軍〕万歳！群衆は叫びをあげる！ロシア軍万歳！私もそこにおいて、見る、主婦たちが、妊婦たちが、兵隊が、狂ったようにSAに飛びかかろうとする！突撃！今度はもうぐちゃぐちゃだ！一人死ぬだけじゃ済まないだろう！……⁶⁾

先ほどの引用箇所で行くつかの国名も示されていたように、そこにはナチスに占領されたためドイツ側で戦うことになった様々な国の兵隊たちや、そしてドイツのために働くことになった一般人らがいた。ただでさえナチスに恨みを持つそれらの人々が疲労と空腹で理性を失い、ほとんど暴徒と化し、全く抑えの効かないままナチスに襲いかかろうとする。だがもしそうなったら、武装したSAに一齐に反撃され、多くの一般市民が命を落とす惨事になったことだろう。しかしその爆発寸前の事態は、ラヴァルの登場によって一瞬のうちに収まってしまふ。「そこでだった、またしても歴史的な行為だ、ラヴァルが全てを救ったのだ！もし彼が現れなかったら、ちょうど

そのとき、一斉射撃が起こってそれきりだったろう！……だが幸い、彼が出てきていたのだ！……⁷⁾」ラヴァルを見た群衆は一斉に怒りを静め、それだけで事態は収拾する。彼は死んでしまったドイツ兵に対してひざまずいて敬意を表したのち、その場に集まっていた市井の人々と話を始める。

ラヴァルとその細君が男女隔てなく誰とでも親切に話してくれそうな様子で、全く偉そうにしているのを見て、騒動は鎮まった！……もう人殺したちの方も見ない！……死んだ男も！……ラヴァルと細君に関心が移っていた……みんなこの機会を利用して……質問した！……戦争はすぐ終わるのか？……ドイツが勝つのか？負けるのか？……ラヴァルなら知っているはずだ！……彼なら！何でも知っているはずだ！⁸⁾

こうしてラヴァルは群衆と話をして彼らの興味を満足させてやりながら、何事もなかったかのように一緒に帰ってゆくのだ。そんなラヴァルをセリーヌは次のようにたたえる。

彼はとても勇敢だった……暴力を憎んでいた（……）生まれながら協調を好んだ……調停者だった！……そして愛国主義者！平和主義者だった！……私から見れば屠殺屋ばかりの世の中だが……彼は違う！違う！……違う！……⁹⁾

『城から城』の作品分析をし、この場面について語っている研究者としては、たとえばアンヌ・アンリが挙げられる。彼女の *Céline écrivain* によると、このラヴァルの力は権力者なら必ず持つ「他人を惹きつける力」«le pouvoir magnétique»を表しているという。そしてここから、理屈では説明できない畏敬の念を引き起こす能力のみが偉大な人間の力の源であるというセリーヌの思想を説明している¹⁰⁾。またアラン・クレシウッチはこのエピソードを引用し、駅という場所そのものにさまざまな象徴的な意味を見いだしているが¹¹⁾、この混乱を収める者については触れていない。

いずれにせよセリーヌがこのように一人の登場人物に特権的な役割を与え、手放しでたたえるのは非常にまれだと言わねばならない。しかも最初から聖者のような存在として描いた架空の人物、例えば『夜の果ての旅』のモリーなどのような人物であるならともかく、これは実在した一人の政治家なのだ。セリーヌは本当に、ラヴァルがこのように英雄的な人物であると考えていたのだろうか。

2 ラヴァルの政策と思想

ここで、ラヴァルが実際にはどんな人物だったかまとめておく必要があるだろう。

彼の政治家としてのキャリアは、1914年パリに隣接するオベルヴィリエ市の代議士として始ま

る。31歳だった。当初は革命的社会主義を唱える政党に属したが、このような左翼傾向が彼のキャリアに後々まで影響した様子はなく、ほどなく保守派に転じている。23年からは同市の市長を務める。31年から首相となるが、36年には左翼の人民戦線内閣によって政界から追い落とされ、左翼に対して敵意を持つようになる。40年ドイツによるフランス侵攻が始まり、同5月に敗戦が決定的になると、倒れたレオン・ブルム内閣の後をついでラヴァルは再び内閣に入る（国務大臣兼副首相。一度更迭された後、首相に復帰している）。そして敗戦によって大いにショックを受け、混乱した国民のモラルを保つため、ペタンを国家元首とする新体制を作り上げる。ペタンは第一次世界大戦で司令官としてヴェルダンでの激しい闘いを勝ち抜き、フランスを勝利に導いた英雄であったため、疲弊した国民に大いに支持を受けるはずだったからだ。こうして生まれたのがヴィシー政府だった。

ヴィシー政府は「労働・家族・祖国」というテーゼを掲げ、これまで以上にカトリックの教えを重んじ、右翼的傾向を強く持った。そしてなにより対独協力政策を進めたことでよく知られる。中でもラヴァルは「対独協力のチャンピオン¹²⁾」と呼ばれるほど、ドイツに有利な数々の政策をとった¹³⁾。アルザス地方をドイツに割譲したり¹⁴⁾、イギリスとの闘いのためにパイロットをドイツに提供したり¹⁵⁾した。またイラクの油田地帯を制圧し、ドイツ、フランス、イタリアがイラク石油開発の主導権を握る計画を立てたり、アフリカのイギリス領を奪って、ドイツと共同統治を計画したりもした。1940年10月にはユダヤ人の強制収容を認める法律が制定された¹⁶⁾。ユダヤ人の迫害はドイツからの圧力が強かったために行ったと後の裁判でラヴァルらは証言したが、パクストンによればドイツがフランスにユダヤ人の強制収容を命ずるようになったのは42年からのことであるため、40年のフランスの反ユダヤ主義的対応には自発性が見られるとされている¹⁷⁾。占領期のフランスにおけるラヴァルの態度を最も端的に表す有名な言葉がある。それは「私はドイツの勝利を願う、もしそうならなければボルシェヴィズムが蔓延するからだ」というものだ¹⁸⁾。このように共産主義の脅威からヨーロッパを守るためにドイツを支持する、というのは当時の右翼思想家が持った一般的な考え方で、もちろんセリーヌも同じ考えを繰り返し表明している。

国際世論を見ても、ラヴァルは好意を抱かれるような政治家ではなかったのがわかる。アメリカの歴史家ガンによると、ラヴァルは「アメリカ人にとっては嫌悪すべき人物だった」という。国務長官コーデル・ハルなどはラヴァルのことをナチズムの道具として激しく非難しているし¹⁹⁾、ラヴァルがヴィシー政府内で一度役職を解かれたときもアメリカの圧力が理由の一つだったと言われている²⁰⁾。ただ、それはラヴァルが単にドイツの勝利を願ったからではなかったという。特に戦争初期はアメリカにも、ドイツが戦争に勝ち、共産主義の防波堤となることを願っていた者は多かった。それにもかかわらずアメリカ人が彼を嫌った理由は二つある。一つはラヴァルがユダヤ人排斥を強めたことであり、もう一つは彼が「傲慢で腹黒く計算高い政治家²¹⁾」の一人だったことだ。ヴィシー政府の下でのユダヤ人犠牲者数はポーランドなど東欧に比べれば圧倒的に少なく²²⁾、その意味では強い非難がなされることは一般的に言ってそれほどない。ただ、ガンによると当時のアメリカではすでにユダヤ人ロビーの勢力が強かったという。国際博愛団体ブナイ・ブリスはメンバーの多くがユダヤ人であるが、その団体の中心人物の一人ヘンリー・モーゲンソ

ー・ジュニアが当時アメリカの財務長官でもあり、また大統領ルーズベルトと親しかったことから、それはうかがえる²⁵¹。そのため、反ユダヤ法を制定したラヴァルはアメリカ人にとっていい印象は与えなかったはずだ。では、腹黒く計算高いという人格面での攻撃は何によるものだったのか。

ラヴァルの思想や人格については、多くの人物が語っている。例えば彼は若い頃弁護士として活躍していたが、事件から実際に訴訟を起こすのを極力避けたという。彼は相手を説得する技術に長けていた（ジュリアン・クレルモンはこれを「絡みつきの技」*«l'art de l'enlacement»*と呼んだという²⁵¹）。弁護の技術を法廷で使うのではなく、あらかじめ相手側の弁護士を説得して和解に持っていくことを好んだのだ。ただもちろんこれは弁護士本人のためになる方針ではない。このように和解によって訴訟を終結させるのでは、成功報酬が得られないからだ。それが自分にとっては好ましくない結果となっても、相手と争って、事の是非をはっきりさせるのを避ける。どうもこれは彼が生まれつき身につけており、一生とり続けた態度のようだった。というのも、争いごとを嫌う彼の性格を証言する者は非常に多いからだ。ラヴァルを弁護したアルベール・ノーは、有罪判決を受けた裁判のやり直しに協力してくれるようレオン・ブルムに会っているが、そのときブルムが「ラヴァルは卑怯なほどに平和主義者だ²⁵¹」と発言したのを記録している。裁判のために実際に本人に接触したノーも、これはラヴァルの本当の姿を表す言葉だと認めている。それは、彼がラヴァルの次のような言葉を聞いているからだろう。「侵略だろうが、防衛だろうが、戦争を肯定するものは何もない。[……]死者の数や廢墟の数を数えてみなさい。おそらく何世紀にもわたって人類が苦しんできた悲惨な状況のことを考えてみなさい。そしてもちろんのことだが、どんなことであれ戦争以上に望ましくないことがあるか、言ってみなさい。私はどんなことがあっても戦争は望まない。勝ち戦でも負け戦でも、私は戦争の中身を知っているからだ。²⁶¹」1917年に第一次世界大戦反戦デモが起こったとき、政府は実力でこれを鎮圧したが、ラヴァルはこのような政府の対応を批判していた。また第一次世界大戦終結時には、敗戦国ドイツに非常に不利な内容であったヴェルサイユ条約に反対票を投じてもいた²⁷¹。さらに1931年には対ドイツ強硬派のタルデュウとマジノを招いて、ドイツと和解するよう説得している²⁸¹。また第二次世界大戦が始まる直前の1939年にも戦争回避を訴えていたことも知られている²⁹¹。ラヴァルのこのような態度を評して、ギ・ベシュテルは「この平和主義的態度はあまりに強力で、要求が高いものであり、ラヴァルの考えにおいて単なる政治方針の枠組みを越えていた。平和への絶対的信仰にとりつかれていたのだ³⁰¹」としている。ラヴァルは第二次世界大戦当時、軍の総司令官ヴェイガンとは最初から意見が対立していたというし³¹¹、これもまた同じく軍人であるベタン国家元首とも仲が悪かったが³²¹、ここにも彼の戦争を嫌う態度が出ていていると見ていいかもしれない。そもそもラヴァルは戦争を語る以前に暴力そのものを嫌っていたようだ。占領下のフランスで闇市が広まり、対策に苦慮した行政側では取り締まりを厳しくして死刑をもって罰せよという意見もあったほどだが、ラヴァルは断固として反対している。また41年8月27日には暗殺未遂にあり、心臓に弾丸が達するほどの深い傷を負ったが、自分を撃った犯人が捕まっても「彼を痛めつけてはならない」と命令し、銃殺することに反対した³³¹。

先に見たようにハルはラヴァルを「計算高く腹黒い」と言い、ブルムは「卑怯なほどに平和主義」と言ったが、このような徹底した平和主義が、かえってラヴァルを日和見主義的で態度が一貫しないように見せていたのかもしれない。戦争が始まる前はその回避に尽力する。しかし敗戦が決まると国内がこれ以上荒廃するのを避け、戦後のフランスの立場を有利にするために、積極的にドイツに協力する³⁴⁾。高等法院の裁判長ルイ・ノゲールは、ラヴァルはフランスを離れてから後、政治的な影響を持つ発言をした形跡が全くない、と言っている。実際、アメリカが参戦しドイツの敗北が色濃くなると彼は積極的な対独協力派から抜けだして、「居眠り派」«les Dormants»と呼ばれる立場に収まり、政治的活動をほとんどやめてしまっている³⁵⁾。ベシユテルによるともともとラヴァルは考え方が柔軟で議論の相手にするのが難しく、どんな意見でも飲むためか「これは人間ではない、[調味料を入れるような]小瓶だ」とまで評されたと言うが³⁶⁾、このような変わり身の早さは彼の大きな特徴だったと言えるだろう³⁷⁾。

フランス敗戦からドイツの崩壊が始まる頃まで、ラヴァルが強く対独協力政策を進めたことは確かだ。終戦後、肅清の風潮が強まる中、一度きりの裁判で有罪判決をうけて処刑されたのも当時の特殊な風潮を見れば避けられないことだったろう。47年にスイスで死後出版された自著『ラヴァルは語る』*Laval parle*で、彼は自分がとった政策はフランス人にとって有益な唯一の政策だったし、そのことを誇りに思っているという点を強調している³⁸⁾。当人の発言をそのまま認める歴史家は少ないが、それでも彼がドイツに協力したり、政治方針をいろいろ変えたりしたのも、争いを悪と捉える生まれつきの信念ゆえの行為であったのは確認しておかねばならない。民主主義の理念を重んじていた20世紀初頭のアメリカ人にとっては政治的立場が一貫しない狡猾な人物に見えたかもしれないが、国益を守るという理念は一貫していた。そしてあまりに柔軟な政策をとった結果、それが後世に強く批判されることになった。ブルムの「彼は卑怯なほどの平和主義者。それが彼の犯した罪だ³⁹⁾」という言葉はそのことを意味しているはずだ。その批判も納得のいくものではあるが、彼の政策は反暴力と国内の平和を考慮したものだったという点は大切だ。

3 セリーヌの見たラヴァル

ではセリーヌはラヴァルのことをどう見ていただろうか。両者の関係を確認し、ラヴァルに対する印象が小説での扱い方に影響しているかどうか考えてみたい。

まず、ミルトン・ヒンダスはその点について次のように語っている。「セリーヌはジクマリンゲンのラヴァルのことも覚えていたが、彼にある種の友情を覚えるようになったという。ラヴァルもまた平和主義者で愛国者だったらしい。⁴⁰⁾」セリーヌはジクマリンゲンでラヴァルに会ったようだが、ラヴァルが平和主義者である点をセリーヌも認めているのは興味深い。また、国家反逆罪を問われ裁判にかけられたセリーヌを弁護した弁護人の一人アルベール・ノーは同様にラヴァルの弁護人でもあったが、セリーヌはこのノーに対してラヴァルの印象をこう述べている。「ジクマリンゲンではラヴァルとも知りあった。彼は嫌いだった。私の方もずっと前から嫌われてい

た。後で実際に会ってみると（ラヴァルを診察したので）、彼に共感を抱くようになった。彼には美德が二つあるように見えた。いかなる暴力にも絶対に反対し — この点ではガンジー主義者だ —、非常に愛国主義者だった。この点では私と同じく狂信的なほどだった。⁴¹⁾これはセリーヌがヒンダスに語ったラヴァルの姿と一致する。

この二つの証言を見ると、セリーヌはラヴァルの信条に対して好感を抱いているようである。しかしこれだけがラヴァルに対して抱いていた印象と見るのは不適切だ。まずヒンダスの証言が48年7月に、ノーへの手紙が47年9月に書かれたものであることには注目せねばならない。セリーヌは終戦直後からデンマークに滞在していた。フランス国内では45年4月に国家反逆罪の容疑をかけられ逮捕状が出されており、フランス政府はデンマークに身柄引き渡しを要求していたが、デンマーク側はこれを拒否、代わりにセリーヌを監獄に拘禁した。そして47年6月に釈放されたが、デンマークから離れることは許されていなかった。そしてこの後、50年2月にフランス国内で欠席裁判が行われ、有罪判決が下されることになる。ヒンダスとノーに対する発言はちょうど、セリーヌがデンマークに足止めをくらってフランスに帰れなかったころ、容疑が固まりつつあって有罪判決が下されそうになっていたころのことなのである。そのような微妙な時期だからこそ、特に弁護人のノーには自己弁護になるような形でラヴァルの話を持ち出した可能性は高い。ラヴァルが平和主義で愛国者であったのは本当だろうが、セリーヌは自分と同じくそうだったという文脈で弁護士に語っているのだ。しかもノーが少し前にラヴァルの弁護に失敗している（当然だが）ことを考えると、ノーの失敗をねぎらって、自分に対する心証を良くしようとしているとも見なせる⁴²⁾。また、セリーヌは友人に宛てては「ノーはとても親切だが、あまりまじめではない（ここだけの話だが）。もう一人の弁護人、ラスパイユ通り95のティグジエ＝ヴィニヤンクールはずっと大胆で、覇気があり、円熟味がある⁴³⁾」と言っており、また別の弁護人ミケルセンにも「ラヴァル裁判からずっと、ノーは一人の男であるというよりも女優だ。一人だけ舞台上に立ちたがる⁴⁴⁾」などと批判しており、さすがに心を開いていた相手とは考えにくいので、ラヴァルに対して判断を下している箇所もどれだけ信用してよいか迷うところだ⁴⁵⁾。

ただ、両者の間に個人的な関係があったことは指摘しておかねばならない。ヴィシー政府の閣僚たちはジクマリンゲンではホーエンツォレルン家の城に滞在していた。ラヴァルにあてがわれた部屋にはダンスホールのように広いサロンがあったという。それに対し、セリーヌら一般人は町の狭いホテルにいた。セリーヌの妻はバレリーナであったため、そこでラヴァルの広いサロンをダンスのレッスンに使わせてほしいと願い出たようだ。ラヴァルは快くその許可を与えたとアラン・ドゥコーは書いている⁴⁶⁾。これはセリーヌとラヴァルが親しい間柄であったことを示すエピソードと考えていいだろう。

そもそも両者の関係は、セリーヌとラヴァルの実の娘とが友人であったことから始まっていると考えられる。ラヴァルの娘は後にシャンブラン侯爵夫人として知られることになるジョゼ・ラヴァルであり、ジボーによるとセリーヌは、作家で後にスイス大使となるポール・モランの家で彼女と知り合ったようだ⁴⁷⁾。時期は明記されていないが、遅くとも43年以前であるのは確からしい。これはまだセリーヌがパリを脱出するしばらく前であり、ラヴァル本人と面識ができるずっ

と前のことだ。セリーヌとジョゼ・ラヴァルが一時期同居していたことを考えると、かなり親しい友人だったのだろう⁴⁸⁾。

セリーヌは医者であったのでジクマリンゲンでもラヴァルの診察をただけだと言うが、以上のような個人的な関わりまであったことを考えると、連合軍が迫ってくる中、中立国であり距離も近い外国であるスイスへ亡命できるよう手配してほしいとラヴァルに頼んだのも無理はないと考えられる。だがジャン・ポーランへの手紙を見ると、この頼みは拒否されたらしい⁴⁹⁾。セリーヌは後々までこのことを恨んでいたようで、これに関してたびたび発言をしている。まず弁護人の一人ミケルセンへ宛てた46年の手紙では、「フランスの司法の攻撃はスイスには全く向けられていない — あそこにはベタンの外交責任者ロシャ大使、ベタンの大使ポール・モラン、ラヴァルの官房長ジャルダンなどなどがいるのに」と書いており、スイスへ行けなかった無念さを打ち明けている。彼は続けて、「こうした連中の名前は怒り狂ったシャルボニエール〔セリーヌの逮捕に尽力した駐デンマークフランス大使〕の興味を引いてもいいはずなのに。しかしシャルボニエールは思ったより頭がいい — 自分の将来のことも考えているのだ。セリーヌについては何も気にすることはない、というわけだ⁵⁰⁾」と書いているが、これを見るとセリーヌが怒りを感じているのはスイスへ行けなかったことだけではなく、むしろ政治上の役職があれば罪を追求されずに済んだと考えていたからのようでもある。もう一人の弁護人ノーへ宛てた51年の手紙にも「ポール・モランは2度もベタンの大使になり、占領中とはとてつもなく反ユダヤ的な本を書いていたのに、逮捕状が出されることは決してなかった⁵¹⁾」として、戦後になってもずっと同様の感情を持ち続けていたことがわかる。また、『またの日の夢物語』の中にも「奴らには腹が立つ、私だけに『逮捕状』を出して！……私は何者でもなかった。藁の寝床の上で思い出す……大使にも、大臣にも、協力者にも、〔……〕プチスイスにもなれなかったし、将来もなれない！」という発言がある。ゴダールの指摘によると、このプチスイス（チーズの名前）というのは、ラヴァルがポール・モランを特別に大使に任命したことを非難する言葉である。『城から城』本編にも、類似の発言はあるし⁵²⁾（「私がここ〔ジクマリンゲン〕にいるのは総理、完全にあなたのせいだ！ 私が他の場所で落ち着くのを徹底的に拒んだんだ！あなたにはそれができた！完全に！」）、またサン・ピエール・エ・ミクロン諸島総督に任命してもらえるよう頼んでいるのもこうした背景があつてのことだろう。

弁護士への手紙に自分を正当化する主張が見られるのは当然と言えるが、これだけ繰り返し書いてあるのは偏執的とも言えるだろう。ラヴァルが自分に役職をくれなかったこと、その結果逃亡もうまくいかず戦後罪を追求されたこと、そのためラヴァルを恨んでいたことは确实だと思われる。セリーヌは1946年のミケルセンへの手紙で「時代は罪人を必要とするもの、それだけで十分だ。私が『怪しかった』、それだけで十分だ。万事これだけで十分だ。〔……〕フランス人全体が協力していたのだ！例えばヴァレンヌ〔各国の大使館が並んでいるパリのヴァレンヌ通り〕はドイツ軍のために弾薬や飛行場を作って、誰もがそれを見て知っていたのに、それで数億フランも稼いだのだ⁵³⁾」と書いている。セリーヌはこのように、対独協力という点では誰もが罪深かつたはずなのに、自分だけが貧乏くじを引かされたと考える傾向があつたが、その分いっそうラヴ

アルへの反感は強いものだったろう。

そのような気持ちが表れたためか、彼に対する根柢のない単純な中傷もよく見られる。ドイツの西ヨーロッパ情報局長ヘルマン・ピクラはセリーヌがラヴァルを評して、彼は「典型的な『ユダ公』*«“youpin” typique»*」であって、必ずドイツを裏切るだろうと言うのを聞いている⁵⁴⁾。また友人ル・ヴィガンへの手紙ではラヴァルのことを「無駄遣いのユダヤ人*«Ce juif abusif!»*」と呼んでいる⁵⁵⁾。ラヴァルは刑務所内で青酸カリを飲んで自殺をはかったが、青酸カリが湿気ていたため失敗した。そして治療を受け、その数時間後に銃殺された。だから無駄遣いとは、自殺に失敗して青酸カリを無駄にしたことを言っているわけだ。ではなぜユダヤ人なのかというと、それはラヴァルが外国人風の風貌をしていたからだろう（『城から城』の中ではアラブ人とも呼んでいることから、セリーヌは特にユダヤ人という言い方にはこだわっていないようだ⁵⁶⁾）。歴史家のベシュテルは次のように書いている。「シャテルドンにおいてさえ、同じ年頃の級友はすぐに彼〔ラヴァル〕の見た目を馬鹿にした。オベルニュ出身には全く見えず、違う人種のように見えたのだ。彼はその異国風の顔立ちから、『ジャマイカ人』と呼ばれたが、こう言われるともものすごく怒るのだった。後に仕事上でも、この顔の特徴をあげつらう意地悪な者もいて、当時としては不名誉な呼び方だった『ユダヤ人』という呼び方をする者さえいた（その中にはモラスもいた⁵⁷⁾」ラヴァルはオベルニュ出身だが、ここはかつて異民族の侵略を多く受けたため混血の進んだ地域であり、そのためラヴァルも外国人風の顔をしているのだとベシュテルは説明している。またパリを抜け出す前、だからこれはラヴァルを個人的に知る前の話になるが、セリーヌは駐独フランス大使プリノンにLVF（反ボルシェビキフランス人義勇軍団。フランス人によって結成され、ドイツ軍の一連隊として配属されてソ連と戦った。）のプロパガンダをするよう頼まれている。セリーヌはもともとこのような政府主導のアジテーションには参加しなかったとされているが、この時の依頼について後に「ラヴァル一派を喜ばせるためにボルシェビキを殺しに行くなんてとんでもないことだとずっと思っていたし、繰り返しそう言っていた⁵⁸⁾」と語っている。LVFが活躍すればいわばドイツに貸しを作ることにつながり、のちのフランスの立場を有利にする可能性があった。そのためLVFの活動を強化するのはラヴァルにとって望ましい政策であっただろう。この発言を見ると、セリーヌはそのようなラヴァルの考えに反感を持っていたとも推察できる。

補足だが、ラヴァルの死についてセリーヌが触れている箇所もよく見ておく必要がある。ラヴァルは服毒自殺に失敗して、容態が回復した直後に銃殺されており、その悲惨な最後はよく知られていた。『またの日の夢物語』でもそのことは簡単に触れられている。「古代人の死に方はひどい。その証拠はバカロレア、倫理学だ……みんなこれには賛成だ、ただし修道士フランソワ〔モーリアックのこと〕とピエール・ラヴァルは除くが……⁵⁹⁾」つまりラヴァルは自分の死に方がひどいものだったので、古代人の死に方もあまり悲惨なものとは見なさないだろう、という理屈だ。また『またの日の夢物語』初期ヴァリエーションの一つには「世界はそれで腐ってゆく、我らの大地は涙でぬかるみとなる、悲しみで泥となる、5億対の瞳はもう止めどなく涙を流し、小川となり、大河となり、滝となり、湖となる、プーヒェンヴァルトから〔読めず〕まで、モンルージュからノエまで、血で赤く染まったモルネを越えて〔……〕⁶⁰⁾」という言葉遊びの混じった文章が残され

ている。ブーヒェンヴァルトはナチスのユダヤ人強制収容所があった場所だが、モンルージュはラヴァルを含む戦後対独協力者が処刑された場所、モルネはラヴァルの裁判を担当した検事だ。ナチスの犯罪と、戦後のフランス国内の対独協力者粛清を同列に見立てているわけであり、これは非常に興味深い。一般的なフランス人から見ればラヴァルらが処刑されたのは当然のことなのだろうが、最終的には恩赦を受けて、反逆罪を裁かれずに済んだセリーヌ、かろうじて助かったセリーヌから見れば、この血で赤く染まったモルネは粛清の理不尽さを訴えるための表現なのだと思う。『城から城』にも「ああ、モルネの一派は彼〔ラヴァル〕の言うことを聞こうとしなかったろう？……それより銃殺する方がよかったんだ！……奴らは間違っていた！……彼〔ラヴァル〕には言うことがあったのに……⁶¹⁾」とあり、粛清する側の無理解を取り上げている。そうした点から見ると、個人的にはラヴァルに良い感情を抱いていなかったとしても、彼が自分とよく似た時代の犠牲者であったという点にはよく理解と共感を示していたと言わねばなるまい⁶²⁾。

セリーヌがラヴァルにどんな認識を持っていたかを完全に知るのは難しい。しかし残されている証言や資料から推察すれば、次のようなことはおそらく言えるだろう。セリーヌはラヴァルに対して、その家族も含めて個人的なつきあいがあった。ラヴァルの平和主義、愛国心を賛美したことにはいくらかの計算もあるかもしれないが、それでもその思想に共感を持っている。そのため自分と同じ粛清の犠牲者として、その死を悼む気持ちもあるようだが、しかしラヴァルが自分に政治的な便宜を図ってくれなかったことは快く思っていない。むしろ、その点では後々まで恨みを持っている。

以上の点を踏まえた上で話を『城から城』にもどそう。駅のシーンでラヴァルは一種の英雄、救世主であるかのように描かれた。これはラヴァルの平和主義、反暴力という信条を適切に表しているとは言えるかもしれない。しかしその点を除けば、ラヴァルに対するセリーヌの態度は決して好意的なものではなかったはずだ。セリーヌは実生活で個人的な恨みを持った人物に対して、小説の中でさんざんにこき下ろすことが多かった。例えばセリーヌの小説を出版したガストン・ガリマールに対しては自分を搾取していると考えていた可能性が高いし、セリーヌはドイツに買収されたと言ったサルトルに対してはそのことで恨みを抱き続けており、複数の小説の中で非難や揶揄の対象にしていた。そういう点を考えると、ラヴァルを一種の英雄として描く理由があったのか大いに疑問になる。

4 『城から城』 草稿でのラヴァル

ところで『城から城』最初期の草稿として、ニューヨーク大学で保管されていてアンリ・ゴダールが編集、公開したものがある⁶³⁾。ゴダールによると、これは将来決定稿にも残るような重要なシーンをいくつかすでに語っているという点で決定稿に近いとも言えるが、語り手のコメントが多かったり文体が異なったりする点、当然のことだがまだ付け加えられていないエピソードも多いという点で決定稿から大きく離れている。ここでまず注目したいのは、決定稿ではラヴァル

に関する重要な二つの場面、駅の暴動の場面と、セリーヌが植民地の総督に任命してもらった場面が、この最初の段階ではまだ生まれていないことだ。この草稿にはラヴァルが散歩の途中困っている人を助けるシーンがあるが⁶⁴⁾、ゴダールは、駅で暴動を鎮圧する場面はこれから発展したのかもしれないと推察している。これはごく短いもので、「彼〔ラヴァル〕は本当に感じがよくて、上辺だけの様子をするのがなかった……ジークマリンゲンでは、困っている人、荷物や鞆やぼろ着を持ち歩いている本当にかわいそうな人たちを道ばたでラヴァルが手助けしてるのを見た⁶⁵⁾」となっている部分だ。駅での騒動とは描写の点であまり似ていないかもしれないが、散歩中のラヴァルが一般の人々と接触を取っているという点では近いかもしれない。現実においても、ジクマリンゲンでは、ペタンが車で散歩していたのと違ってラヴァルは徒歩で散歩していたようであるし、それに付き添っていた秘書はラヴァルが一般人とよく話をするのを見ている。ただし、もちろんこの秘書も駅で暴動が起こりそうになってラヴァルがそれを取めたという証言はしておらず、暴動そのものはセリーヌが後で考えだした純粋なフィクションと見るのが妥当だろう⁶⁶⁾。

ではこの草稿ではラヴァルに関する記述が少ないのかということ、そのようなことはない。むしろ決定稿よりも多いのではないかという印象さえ受ける。たとえば草稿では、とっておいた肉が腐ってラヴァルが怒る場面があるが、これは決定稿では見られなくなっている。

ラヴァルの話をしていたっけか、ちょっとした事件について……三人ともみなわめき始める……そう！そう！わめくんだ！……女中も、将校も、ラヴァルも……喧嘩していたわけじゃない……飛行機の爆音のせい、窓ががたがた震えて激しく音を立ててたせいだ……『何て言った、何て言った』ラヴァルが大声で言う……『子牛肉が腐りました』『子牛肉？』『鶏肉もです』『そうです！全部です！』……なるほど……どなっていたからなんとか聞き取れた……やっぱり窓の外に子牛の塊肉を吊っていたんだ……保存用の肉だ……城ではみんな知っていた、ジークマリンゲンに住む人たち、避難民たちもみな知っていた……女中は肉が全部、突然腐ったと知らせに来たんだ〔……〕彼〔ラヴァル〕は窓のそとで急に肉が腐ったので、不愉快そうだった！……窓の外に出しておいたのに！……彼はむしろ育ちの良い人間なのに……怒っているようだった！……拳を叩いていた！……そう、拳を！地団駄踏んでいた！……私を疑いの目で見ていた、将校も、女中に対してもそうだった……

『まったく！まったく！』

もう少しで私が疑われていた、私が！……私が！……肉がどこにあるかもよく知らなかったのに、どの窓にあるのかも！⁶⁷⁾

一国の首相ともあろうものが、自分の食料を巡って大声でわめいている。肉を腐らせただけでいかにも悔しそうに、周りの人間にあたっている。しかもその肉はこっそり隠しておいたものであり、飢えで苦しんでいるはずの町中の一般市民もそのことを知っていたという。そのあげく、女中やセリーヌなど他人を疑いの目で見て、そしてさらには城中の閣僚が自分を中毒死させようとしているのだと妄想する。

「先生！先生！この城にいるのは敵ばかりだ！こっちへ来て下さい……ほら上の方！」私に「上の方」を指さしてみせる……上の階には元帥がいる……六階は全部元帥の部屋だ……

「この奥も！」

奥はブリノンの部屋だ……

「あそこも！そこも！そこも！」

拳で指し示す……「あそこ！あそこ！あそこ！」がどこのことかはわかる、ダルナンだ……そしてデアも……アーベッツもおそらく……ホフマンも……ペーメルブルクも……

「町の中でもありますよ、知ってますか？」

「いや、その……」

「みんなです、先生、みんななんです！」

「本当ですか？」

「でもどうだっていいんです！奴らは！よく聞いて下さい、先生！私を毒殺でもしにければいいんだ……みんなで！みんなで！」⁶⁸⁾

ここでラヴァルは、滑稽ではあるが、同時に卑小で心が狭い、非常に神経質な人物として描かれていることがよくわかる。

この草稿では、一般人の苦しい生活を挙げてセリーヌがラヴァルを責める場面もある。

「言っておきますが先生、私は30年来節制してますよ」

「そんな節制はだめです！……肉を10倍も食べ過ぎている！」「じゃあ、あなたは？」「私たちはみんな、ひもじくて死にそうですよ、あなたは知らないでしょうが！ジークマリンゲンでは飢え死にしそうなのが1000人もいて、もちろんその1000人は城にいるような人たちじゃない！あなたの被害者ですよ総理！子供や老人や、みんな疥癬にかかっているんですよ総理……」⁶⁹⁾

決定稿ではセリーヌが自分の不幸をラヴァルに訴える場面はあるが、このように他の人々の窮状を訴え、ラヴァルの責任をはっきり問いつめる場面はない。しかも「[自分たちにとっては敵地にあたる] ロンドンに行っていたらもっとまじだったでしょう⁷⁰⁾」と皮肉を言うように、セリーヌはラヴァルの政策そのものまで批判するに至っている。

それ以外にも、この草稿での記述からそのまま発展して決定稿に残ったのだらうと考えられる部分もいくつかあるので、それらも確認しておきたい。決定稿では、それらはラヴァルの執務室で両者が会見する場面で主に書かれていることだが、草稿ではそのような状況はなく、単に語り手がラヴァルについてコメントをしてるという形をとっている。

まず、いかにラヴァルがたばこ好きかという説明がなされているところを草稿の中に見てみたい（ある箇所では、「彼は一日に四箱吸った……私の前では平気で吸った……他の誰かが会いに来ると、たばこを消して逃げてゆくのだ……人にたばこをやるより出ていく方がいいのだ……⁷¹⁾」としている）。これはセリーヌがラヴァルと密売人との関係を疑うところから話が始まっている。

セリーヌは自分が医療行為をするため密売人から高価な薬を買わねばならないと嘆くが、それに続いてこのように言う。

確かなのは、やつら〔密売人〕がラヴァルに品を流していることだ、ガルデナール〔セリーヌが必要とする医薬品で、てんかんの治療薬〕じゃない、ラッキーストライクだ！……まったく、大したものだ！ラヴァルがどんなにたばこを吸うかは有名だ！それにつけ込んで儲けようとする奴らに、どんなに怒っているかということも！『密輸業者』に好きにされていると言って……私が気に入られているのは、たばこを吸わない点だった……私がいても気兼ねなく吸えるからだ……彼はたしかに愛国心が強いが、たばこ一本ももらったら県を一つ差し出してしまうだろう……人にたばこをやることはなかった……一人で吸いたがった、必ず一人で……⁷²⁾

ユーモアを演出してこのような言い方をしているとも言えるが、まず生活に困窮している避難民ばかりのジークマリンゲンで自分だけは密売のたばこを高価な値段で買っていると公表するのは冗談というだけではすまされないだろう。もちろん物資の不足で一番困っているのは、薬もないまま医療行為を行わねばならないセリーヌ自身であるため、それに納得がいかない気持ちも十分に表れている。そして県を差し出すだろうという言い方も、大げさではあるが、実際にアルザス地方をドイツに割譲したラヴァルについてこのような言い方をするのは、少なくとも政治的に非常にデリケートな問題に触れることになる。次に決定稿だが、この箇所は次の部分に発展していると考えられる。

彼は私を十分気に入っている……私は聞き上手だし……それに何より、私はたばこを吸わないからだ！……吸わないから、向こうもたばこをやらなければと気を遣うことがない……大きな引き出し二つ分にぎっしり詰まった「ラッキーストライク」の箱を全部見せてくれた……一本でもたかったら、もう会ってくれないだろう！……決して！……あるいは火をもらうだけでもそうだ！……マッチ一本でも！……

「全部イギリス人にももらったんでしょ、首相？」

「頼まれたんだよ、どうしても全部もらってくれと、先生！」⁷³⁾

ここでは先ほどの部分と同様にラヴァルが非常にたばこ好きであることが伺えるし、しかも、物資不足のせいではあろうが、誰にもたばこを渡さないという彼の吝嗇な姿勢も変わらず見て取れる。しかしたばこをもらった相手はイギリス人とされているため密売人と言うより印象がかなり変わっており、また県を差し出すというような、いわば深刻な批判につながるような冗談に触れていないという点は大きく変わっている。県を差し出すではドイツと密約があったような印象を与えることになるが、イギリスとつながっていたと言うならむしろ反ドイツの姿勢が伺えることになるのである。

次に見るべきなのは、自分がユダヤ人呼ばわりされていると言いながらラヴァルがセリーヌに

詰め寄る場面だ。まず草稿から。

「ご存じでしょう総理、うわさじゃあいろんなことを言ってるんですよ」「うわさ？どんなうわさだ？……私がドイツ人に買収されたとか？私がユダヤ人だとかも言われてるのだろう、ええ？」

ラヴァルと私の間にはちょっとした腹のさぐり合いがあった……彼が一言命令しただけで、私はドイツ人にブーヘンヴァルトより遠くへとばされてしまう……彼はいつもそのつもりだった……彼がユダヤ人の顔をしていたんだ、誰が見てもわかることだった、愉快的な話だ！……少なくともモーリアックやタルトルと同じくらいユダヤっぽい、こう言って何が悪い？〔……〕私はオベルヴィリエの有権者への宣伝として書かれた本について話したことがあるが、その中でグザヴィエ・プリヴァがはっきりと書いていた……オベルヴィリエの有権者を喜ばせるためだった……グザヴィエ・プリヴァはラヴァルの東洋的な魅力、東洋的な目つきを強調したのだ……グザヴィエによると母親からこの魅力を受け継いだのだそうだ……モーリアックも同じ目つきをしている、ほとんど東洋風の……モーリアックはそのうえセクシーだが……ラヴァルは黒くなってしまったような目の色だが、同じような重々しい目つきだ……ヴァレンチノ、ロヨラ、アブド・エル・クリム……自分がブロンドで明るい目をしていたら、こういう連中にはかまを掘られるんじゃないかと不安になる……こんな重々しい目を見たら、警戒してしまうのだ……⁷⁴⁾

ここではラヴァルがユダヤ人の身体的特徴を持っていることについて長々と書かれている。「東洋的」«oriental»という言葉が使われているが、セリーヌはアラブ人はもちろんギリシア人、東ヨーロッパ人も含めてユダヤ人と言うことが多い。だからこの東洋というのもユダヤを表すと考えて問題ないだろう。ラヴァルはよくユダヤ人のように見られるが、代議士として立候補した地方選挙の際、その宣伝のために異国的な風貌が喧伝されたのがそもその始まりであるという。そしてそこで強調されていたラヴァルの目つきは、実は人に警戒心を起こさせる重いものなのだというように、セリーヌはネガティブなイメージを語っている。決定稿において同様の内容を語った部分を見てみよう。

「私をユダヤ人呼ばわりしてくれましたね、先生？わかってるんですよ……あなただけじゃない、『ジュスイバルトゥー』だって！」

「あいつらはそれほどじゃないですよ、総理！……それほどじゃあ！私は確かにそうですけどね、総理！」

「ああ、愉快ですね！面と向かって言ってくれるとは！」

ラヴァルは大笑いだ……意地が悪いわけじゃない……卑劣なやり方はしなかったが、これからどんな目に遭うのかわかっていた……仕方ない！……

「でもご自分でそう書かれたじゃないですか！……」

「ああ、あれは選挙人向けに書いたのだ！……オベルヴィリエの！……」⁷⁵⁾

セリーヌが自分をユダヤ人と呼んだことについてラヴァルは非難しているようだが、セリーヌを少し困らせるだけで、むしろすぐに笑い飛ばしている。セリーヌの方も選挙の際、本に書かれた内容について草稿でのように詳しくは語らず、ユダヤ人の身体的特徴を述べるようなことはしていない。この話題はすぐに終わりになり、セリーヌの書き方も草稿に比べてほとんどこだわりがないのがわかる。

それから草稿でも決定稿でも、かつてラヴァルが一度暗殺されそうになった事件について簡単に触れているが、その件に関してもセリーヌのスタンスは微妙に異なっていたようだ。草稿では、まずロシアで敗退し見捨てられ、骨だけになってしまったかつてのナポレオン軍の兵士たちに、ラヴァルが後押しする対独協力のための軍隊LVFの兵士を重ね合わせ、その上でセリーヌはこう言う。「言っておかなければならない、LVFのことに關しては、みんな覚えてるだろうが、ラヴァルは自分も危険な目に遭った……ある愛国主義者にどなりつけられて、もう少しのところやられるところだった……銃で撃たれたんだ……このことで彼は私のところに診察に来ていた、まだ肺や肝臓が痛むのだった……⁷⁶⁾」これは1941年8月にヴェルサイユで実際にあった事件で、ポール・コレットという右翼主義者にラヴァルが狙撃されたものだ。「LVFのことに關して」とセリーヌが言っているのは、この事件が前線に送られるLVFの兵士たちの閲兵式で起きたものだったからだ⁷⁷⁾。この直前の箇所ではセリーヌが、ドイツと協力してロシアと戦うLVFの悲惨な運命を暗示していたり、そんな対独協力を阻止しようとしてラヴァルを襲った者を「愛国主義者」と言っていたりするのを見ると、撃たれたのはラヴァル自身のせいであって、弁護すべきことだと考えていないように思われる。

しかし決定稿で同じ事件に触れている箇所はこうだ。「彼は襲撃に遭ったことがある、ヴェルサイユで同じ目に遭っていた、見せかけのじゃない、本物だ、レントゲンも撮ったような……まだその銃弾の跡で苦しんでいた……彼はとても勇敢だった……彼は暴力を憎んでいた、自分自身のためじゃない、私と同じように、暴力にはがっかりするし、卑劣だと言って……⁷⁸⁾」もちろん草稿とは話の流れも違うため単純に比較するのは難しいかもしれない。しかし同じ事件を扱いながら、こちらではLVFの結成とそれによるドイツの軍事的支援というある種の戦争犯罪行為にも触れていないし、愛国主義者に撃たれたという言い方もしていない。それどころが、セリーヌはこの事件に触れることでラヴァルの反暴力の姿勢を強調する方向へと話を持っていっている。

そもそもこの草稿では、どの陣営に属するかに関わらず政治家一般をこき下ろす姿勢も見られるが（「他のところではこんな連中は一人も見なかった、城の甘やかされた連中、マリオン〔情報省でセリーヌの知人、個人的にセリーヌに援助をする場面が見られる〕は思いやりがあったと言えるので除くが……みんな残忍なエゴイストだ……ガストンだろうがルクームだろうが〔ガリマルとポーラン〕、ド・ゴールだろうがダル〔アメリカの政治家〕だろうが、スターリンだろうがムソリーニだろうが……つまり動物、それ以上じゃないんだ……」⁷⁹⁾）、上で見たように特にラヴァルに対してセリーヌはたいへん厳しい姿勢をとっている。確かに愛国主義者で戦争が嫌いな点はここでも認めているが⁸⁰⁾、それ以上にラヴァルの人格や習慣、政策などについて批判的に書いているのは注目すべきだ。たばこを密売人から買い、「愛国主義者」に撃たれ、市民の

苦しみを無視するといったようにいかにも売国奴的な性格として描かれている。決定稿ではそのような冗談ではすまされない深刻な批判の傾向は薄まっているが、これは対独協力者ラヴァルにとって本当に痛い部分、道義的な非難を免れないような部分は指摘してはいけないとセリヌが考えたからではないだろうか³¹⁾。ラヴァルの行った政治的犯罪、戦争犯罪から目を背け、彼を擁護しなければいけないと考えたからではないだろうか。駅の暴動のような根拠のないラヴァル賞賛のエピソードを作り出しているのも、同じような意図から出ているのではないか。

5 『城から城』執筆と受容の背景

ここで押さえておくべきなのは、新しく小説を書くときに、なぜセリヌがジクマリゲンでのヴィシー政府関係者たちの生活を描こうとしたか、だ。なぜこのような題材で小説を書くことを考えたのか。この作品によって結果的に、戦後初めてセリヌは華々しい成功を収め、大きな評判となった。1957年のことである。35年の『なしくずしの死』以来高く評価された小説はなかったのも、もちろん戦争などの事情はあったにせよ、20年以上も小説家としては低迷していたわけだ。戦後の45年から51年までは反逆罪で指名手配されていたためフランス国内に戻ることができずデンマークに留まらなければならなかったのだが、51年にはフランスに戻っており、それなりに落ち着いた状況で二つの小説を発表している。しかしこれらの小説、『またの日の夢物語1』『またの日の夢物語2、ノルマンズ』も結局あまり話題にならなかった。

この二作が読者や批評家に認められなかったのは、題材が一般の読者の興味を引かなかったからだとしてセリヌはたびたび言っている。この二つの『またの日の夢物語』が描いているのは、主にデンマークの刑務所の独居房の生活や、連合軍によるパリの空爆である。拘留中の生活という、言うなれば単調で、しかも極端に私的な出来事が読者の興味を引かないという点については想像できるが、小説のパリの空爆が題材としてふさわしくなかったという点は簡単に説明しておかなければならない。第二次世界大戦中、フランス本国の北半分はドイツの占領下に置かれ、パリにもドイツ軍が駐留していた。連合軍による爆撃はそのようなドイツ軍を掃討するために行われたものだ。しかし連合軍に爆撃を受けたという事実は、戦後の一般的なフランス人にとっては認めたくない出来事の一つだった。その理由としては、連合軍、つまりアメリカやイギリスという元々友好感情を抱いていなかった国による爆撃でフランスの市民が被害を被ったという点もあるだろうが、なによりもフランスの解放はフランス人のレジスタンス組織によるものでなければならなかったと考えられていたからだ。例えばフランス北部のドイツ軍を駆逐する最終作戦の際、総司令官アイゼンハワーは西部から進んでパリを迂回して東部に移動する作戦をとったが、レジスタンスの英雄として有名なルクレール将軍は、それを無視して単独の機甲師団でパリに突入し、パリ解放を成し遂げた。このようにフランス人によるフランスの解放が望まれたのは、心情的な面をみても理解できるが、戦後の国際社会でのフランスの立場を良くするためという実利的な理由の方が大きかった。実際、レジスタンスの指導者ド・ゴールも、特に44年から46年の間に行

った演説で、世界におけるフランスの地位が重要になるのだと強調している⁸²⁾。国際的な地位を保つためには、他国に助けられて解放されたのではなく、自分たちが戦闘に参加し、戦果において大きな割合を占めたのだと主張しなければならなかったのだ⁸³⁾。だからわざわざ戦後になって、セリーヌが連合軍による空爆を題材に選んでも、多くの人間に受け入れられる小説にはならなかった。そもそもセリーヌは、連合軍による空爆などなかったことのようにしようとしている世間に対して大いに不満を抱いていた。レジスタンス陣営が築いた戦後の体制において、対独協力者として激しい攻撃を受けたセリーヌにとってそれは許すべからざる欺瞞であり、当然怒りの対象だったからだ。その意味において言えば、『またの日の夢物語』は、対独協力者としての怒りをそのまま社会に認知させようとして、失敗した試みと見なすこともできる。

『城から城』はそのような反省の下で書かれたものと考えられる。実際、セリーヌは『城から城』発表後、インタビューにおいてアルベール・ズバンダンに執筆の理由を尋ねられ、次のように答えている。「ここ数年私はいわゆるタブーの対象となっているので、何にせよ十分大衆向けの本を書いてみようとしたのです、というも題材はよく知られている事実だし、フランス人ならやはり興味を引かれることだし、フランスの〔……〕歴史のある一時期を語っているのですから……つまりベタンとかラヴァルとかジクマリンゲンとか〔……〕⁸⁴⁾」戦争の記憶がまだ薄れていない時期に、その戦争で大きな役割を果たした、誰もが興味を持つような有名な人物を描くことは、少なくとも批評家や読者の注意を向けさせるものだった⁸⁵⁾。ゴダールも指摘するように、このセリーヌの計算は正しかった。さらに、彼が描いたのは単に有名な人物というわけではなく、戦後しばらくレジスタンス神話の陰に隠れて語られずにいた対独協力者たちの生活であったからこそ世の中の関心に訴える力が強かったとも言っておかねばならない。語りにくいことだったからこそ皆知りたがったのだ。また、これは対独協力者側の事情、つまりレジスタンス勢力とは反する立場からの語りであったが、パリの空爆のように、レジスタンス神話を信じようとしている一般のフランス人の自尊心を痛めつける内容ではなかった点もプラスに働いた。軍事や政治に関わるような深刻な内容ではなく、政治家それぞれの内密で個人的な話だったからだ⁸⁶⁾。『城から城』は出版当時から好意的に受け入れられたが、中にはモーリス・ナドーのようにこれは「立派なジャーナリストが書いたルポルタージュ⁸⁷⁾」であり、初期の作品が持っていた魂は失われたと判断した者もいた。しかしセリーヌ自身がこの作品を小説ではなく年代記と呼んでいることからわかるが、ジャーナリストのルポルタージュという言い方は、批判というよりもむしろ、歴史を語りたかったというセリーヌの当初の目的が見事に達成されたことを証明しているだろう。

ラヴァルなどの有名な人物を描いた大きな理由は社会全体の関心を引くということにあったと考えられるが、そう考えるとラヴァルを英雄として扱ったり、草稿では見られた人格攻撃を中止して、むしろ擁護するような書き方をしなければならなかったりしたのも、小説に固有の内在的な理由があったというよりもむしろ、同じように社会に対して何かをアピールする必要があったからだと考えられる。以上のように『城から城』は以前の小説とは異なる姿勢で書かれたが、ではその変化のきっかけは何だったのだろうか。ここでこの小説が読まれ、受け入れられた時代背景、つまりかつての戦争をめぐる50年代のフランス社会の風潮を知っておく必要がある。詳し

くは拙稿「対独協力の観点から見た戦後フランスの政治と文化⁹⁰⁾」を参照されたいが、戦後はレジスタンスを賞賛する風潮がフランス社会の全体を覆っていたとはいえ、特に50年代中期には、ヴィシー政府が統治したあの恥ずべき4年間を許そうとする傾向が政治的にも少しずつ生まれてきていたし、国民の関心も同様の傾向を持っていた。しかしこのような状況は長くは続かなかった。徐々に国民の支持を得られなくなってきた第四共和制は58年に倒れ、その反動で大統領と政府の権限を非常に強くした第五共和制が打ち立てられることになったからだ。その初代大統領となったのがレジスタンスの象徴ド・ゴールである。このフランスレジスタンスの第一人者が国家の最高権力者に返り咲いたことによって、再びド・ゴール流の歴史観が正当化される世相が生まれた。ド・ゴール自身も、まだレジスタンス神話が国民に強くアピールする力を持ち、政治的信頼感を得るのに役立つものであったことを十分知っていた。また大統領就任後、1959年6月18日(1940年のこの日、ド・ゴールはBBCを通してフランス国民に初めて抗戦を呼びかけた)にはレジスタンスの聖地モン・ヴァレリアンで演説を行い、8月29日にはパリ解放を記念する記念式典を行った⁹¹⁾。さらに戦後の国家権力者としてはきわめて珍しくヴィシーを訪れ、市民を慰めて過去の汚名から解き放ち、またマキの本拠地であったモン・ムシェでかつてのレジスタンスの闘士たちを讃えたりもした⁹²⁾。そしてフランスの解放はレジスタンスが勝ち取ったものであり、ヴィシーは正当な存在ではなかった(44年の«Vichy est nul et non avénu»という言葉は有名)という歴史観は、64年にジャン・ムーランの遺灰をパンテオンに移送することで決定的に強まった。

ド・ゴールの復帰は映画や文学といった文化現象にまで影響を与えたと言ってよい。第二次世界大戦を題材にした映画は50年代には少なくなっていたが、ド・ゴールが政界に復帰した次の年、59年からはその本数が急激に増えている。1964年、ペタン主義者だった保守系小説家ジャック・ローランは、ド・ゴールの対外政策およびモーリアックの態度を厳しく批判する『ド・ゴールの下のモーリアック』*Mauriac sous De Gaulle*というパンフレットを書いたが、これが原因で国家元首侮辱罪に問われ、その本も検閲を受けて20ページほどが削除された⁹³⁾。また対独協力作家とされていたポール・モランが、59年にアカデミー・フランセーズ会員へ立候補した時の問題などもある。

6 敗者としての訴え

終戦直後の40年代半ば、50年代、60年代を比べると、レジスタンス神話の否定的な再検討と、そして対独協力を肯定的には言わないまでも、客観的にとらえなおそうという動きは50年代に比較的一番強く進んでいたことがわかる⁹⁴⁾。政治の場でもかつてのヴィシー政府関係者が政界に復帰し、映画や文学でも戦争に対する自由な解釈が許される傾向が生まれていたとも言えるのである。

ただしここで指摘しておかねばならないのは、レジスタンスや対独協力を扱った作品が多く見られるようになってはいたが、実際に対独協力を行った文学者の作品は顧みられることがなかつ

たという点だ。セリーヌが51年にフランスに戻り、『またの日の夢物語 1, 2』を発表したが、いずれの機会でも文学的な成功を得ることができなかったのはすでに見たとおりだが、他にもたとえば、右翼紙『ジュ・スイ・パルトゥー』でブラジヤックとともにファシズムを讃える記事を書いていたリュシアン・ルバテは罪を償い刑期を終えた後も文学的に評価されることがなかった⁹⁰⁾。またモンテルランが54年に『砂のバラ』*Rose des sables*という小説を発表したときも同様だ。実際この作品について、批評家のアンドレ・ルソーは、モンテルランは戦前はすばらしい作品を書いたが、占領期の執筆活動によって汚れてしまい、もう成功するような作品は書けなくなったと厳しい判断を下している⁹¹⁾。

アラン・モリスは次のように書いている。「50年代には、バタンやラヴァルといった政治の世界における対独協力者は文学における対独協力者よりもずっと良い状況にあった。彼らを復権させようとする真剣な試みがなされていたからだ。⁹²⁾」実際、54年に出版されたいへんな好評を得た『ヴィシーの歴史』*Histoire de Vichy*では、歴史家のロベール・アロンが有名な「ド・ゴールは槍であり、バタンは盾だった」という説明を使ってヴィシー政府のとった政策を肯定しているし、ラヴァルに対しても、ルネ・シャンブランが『占領下のフランスの生活』*La Vie de la France sous l'Occupation* (1957) で、ラヴァルはフランスをポーランドのように荒廃させるのを防ぐため、また対独協力が積極的になり過ぎるのを防ぐために、自ら汚れ役を買ったのだと説明し、弁護している。このように対独協力政治家は、もちろん全面的にはないにせよ復権しつつあったのに対し、対独協力学者が復権する動きはなかった。セリーヌが『城から城』でラヴァルを一種の英雄として扱うエピソードを書き、草稿にあった人格攻撃などを削除した理由は、このような社会の傾向を考慮したためだったのではないだろうか。つまり対独協力政治家が見直されつつあった傾向の中、その中の有名な人物であったラヴァル首相を肯定的にとらえ直し、称揚することによって、対独協力学者たる自分自身の復権を目指すという面もあったのではないかと考えられるのである。

このように考えられる理由は、セリーヌがずっと以前から自分の主張を正当化する努力を繰り返し、社会的な認知を失うまいとしていたという点にある。彼は51年に恩赦が決まってフランスに帰国しているが、それまではさまざまな機会において、主に文学作品の中で、自分の無罪を主張している。彼が無罪を訴える主な論理の立て方は主に二通りあった。まず一つめは、戦前の状況を考えると、ドイツと協力することでしかヨーロッパ全体の平和は得られないはずだった、自分は平和のためにドイツとの協力を望んだのだというように、平和思想を述べる方法だった。これは一見理解しにくい考えにみえるかもしれないが、戦前にはヒトラーの脅威がどれほどのものか予測できなかったことや、セリーヌ以外にも同じような主張をする右翼主義者が多くいたということを見ると、この考え自体が間違っただけだったかどうかを、後の歴史を知る者の立場から判断することは難しい。もう一つの方法は、確かに自分は対独協力者だったが、ナチス、ヴィシー政府、右翼系文学者など、自分以外の対独協力者一般とは一切関係が無かった、自分は自由な対独協力者だと主張するものだった。先にも述べたが、セリーヌは買収されたのだとサルトルが発言したとき、それに強い反論を行ったのは有名だ。また後に『またの日の夢物語』に発展す

ることになる初期の原稿でも次のような一節がある。

こうした連中〔ダルクエ、リュシェールなど有罪判決を受けた対独協力者〕はもう雇われ人でしかない — 個人の意見など持っていないのだ — 真面目な話をするには彼らの雇い主のところに行かなければいけない。その雇い主とやらはどこにいるのか？ ヴィシーか？ ベルリンか？ 知るものか — しかし全く忌々しい激高ぶりで、奴らは私を自分たちと同じ雇われ人の仲間に入れようとするのだ！ 『同じ立場なんだよ — おい、ここだよ』なんて風に。これには腹が立つ — 私は自由なんだ畜生！ アマチュアだ！ プロじゃない！ 『鼻輪なんてつけちゃいけない』ヒトラーも関係ない！ ベタンも関係ない！ ラヴァルも関係ない！ 私が『あちこちで』、あまりに大声でそう言ったものだから、私を捕まえろということになってしまった⁹⁶⁾。

ここで雇われ人、プロと言われているのは買収されていた者、ナチスやヴィシー政府、右翼ジャーナリズムといった体制に属し恩恵を受けていた者の意味である。セリーヌはそのような対独協力者と同列に扱われるのを甚だしく嫌い、どの体制とも関係がなかったと言っているわけだ。ただこの点に関しては彼の言うことを鵜呑みにはできない。例えば戦時中には右翼系の新聞に記事を書いたことはないと何度も主張しているが、少なくとも公開される可能性が十分ある形でそのような新聞に投書をしていたことを弁護人のノーにも打ち明けている⁹⁷⁾。弁護人ミケルセンに宛てた46年7月の手紙では、対独協力作家アルフォンス・ド・シャトーブリアンとは1939年以降手紙を書いていないと言っているが、実際は44年に連絡を取っていたことがわかっている。同じくミケルセンへの46年3月の手紙では、自分はドイツの大使館へ行ったことはないと言っているが、伝記作者のジボーはそれが嘘であると指摘している⁹⁸⁾。体制に直接関わっていたのではなく自由な対独協力者だったという主張は、裁判に決定的に有利に働くようなものではなかったろう。しかしそのような主張も繰り返さざるを得なかった、しかもこのように虚偽に近い形での主張までもせざるを得なかったことを考えると、自己弁護がいかに必要であったか、セリーヌがいかに意識的に自己弁護を心がけたかがよくわかる。

51年に恩赦を受けたが、社会的に受け入れられていなかったのは先に見たとおりであり、それ以降も対外的に自己正当化を訴え続ける必要があった⁹⁹⁾。しかしそれに加え、セリーヌは社会的に受け入れられていなかっただけではないということも指摘しておく必要がある。セリーヌは50年に開かれた対独協力者裁判法廷において、禁固一年、罰金5万フラン、財産の半分を没収、市民権喪失という判決を受けている¹⁰⁰⁾。ところで軍事法廷は47年8月16日法により、3年未満の禁固刑を受けている者が戦争による負傷兵である場合に恩赦を与えていた。セリーヌはこの恩赦を受けて上記の罪が許されたと一般に説明されているが、正確に言えば軍事法廷はルイ・デトゥーシュに恩赦を与えただけだった。肝心なのは、この軍事法廷ではデトゥーシュとセリーヌが同一人物であるということが知られていなかったということだ。セリーヌの裁判に携わった弁護士は三人いた。ミケルセンとノーという二人の弁護人が正攻法で作家セリーヌの罪状軽減を勝ち取ろうと困難な努力を重ねていたところ、もう一人の弁護人ティグジエ＝ヴィニヤンクール（多くの

対独協力者を救った非常に高名な弁護士、代議士で、後に大統領選にも出馬している)がこの巧緻を尽くした方法、デトゥーシュに恩赦を勝ち取ることにのみによって、同時に作家セリーヌの身柄を確保するという方法で彼を救ったのだ¹⁰¹⁾。このような事情を知るならば、セリーヌは社会的に受け入れられていなかっただけでなく、法的にも許されていなかったと言わねばならなくなるだろう。歴史家のパスカル・オリは、セリーヌという人物は、戦後社会における対独協力者復権という動きの曖昧さ全てを象徴していると述べている¹⁰²⁾。セリーヌが50年代のフランスで復権を果たしたのは、このような経緯があったことによっても、いっそう奇妙で例外的なケースになっていると考えてよいだろう。

セリーヌがラヴァルを一種の英雄として描くエピソードは、復権しつつあった50年代の政治家に共感を示すことによって、自分を含めた対独協力者全体の認知度を高める効果があったはずだ。しかも彼は、ラヴァルの政策や対独協力思想といった弁護が簡単ではない部分を理屈立てて支持するのではなく、怒った群衆をなだめ、収めるというような理屈で説明できない能力、一国の首相になった者のみが持ち得る威厳、それでいて一般の群衆と気さくに話したりもするという人間的な魅力を描写することで、ラヴァルに心情的な理解が示されることを目指した。また小説中別の箇所では、ヴィシー閣僚が散歩しているとき連合軍戦闘機による攻撃を受けて絶体絶命の状況に落ちながらも、ベタンがその危機を救うという場面があるが¹⁰³⁾、これもまたラヴァルが暴動を救う場面と同じく、時代の流れに乗りながらかつての対独協力政治家に対する心証を良くする大きな効果がある。つまりセリーヌとしては、『城から城』のラヴァルの人物像を通して、自らを含む対独協力者をより良い形で認知させる方法を模索した、という一面もあったのだろう。

結 び

『城から城』が発表されたのは57年に6月だが、出版の一週間前に『エクスプレス』誌が抜粋を紹介していた。雑誌に掲載されていたのは、セリーヌがラヴァルの部屋を訪れるときに行っている独白部分で、そこでは滑稽な調子の独白ではあるものの、ラヴァルが駅で大殺戮から人々を救ったこと、彼が見事な調停者で、大いに讃えねばならないことなどが語られている¹⁰⁴⁾。出版の宣伝のためにこのような文章が選ばれた事実から見ても、ラヴァルのような政治家について語ることは、しかもかつて粛清の時期に国家犯罪者として語られたようにではなく、50年代の比較的リベラルな雰囲気の中で対独協力者の顧みられなかった肯定的な側面を照らすように語ることは、やはり時代が求めていたのだとわかる。この意味でセリーヌの狙いは大いに成功したのだと言える。そしてこれは、『またの日の夢物語』のように、ドイツとの協力が平和への道だったという政治的な主張をしたり、連合軍のバリ空爆という一般のフランス人にとっては受け入れにくい事実を見せつけたりすることによって自分の主張や立場に対する理解を進めようとするのではなく、個人個人の対独協力者の印象を良くすることで対独協力者全体の見直しを迫ったのであり、これもまたセリーヌ自身の復権に大きく寄与したのだ。また対独協力者全般について扱ったパスカル・オ

りの *Les Collaborateurs* や、対独協力文学について詳しく書いているアラン・モリスの *La Mode rétro* でも、戦後のセリーヌの作品傾向について分析されたり語られたりすることはないが、それは対独協力者の擁護の仕方が直接的でなく、間接的で巧妙なものだったからだとも考えられる。

60年代終わりにド・ゴールは政界を引退した。70年代にはその反動もあって、戦争とヴィシー政府を振り返り、良い意味でも悪い意味でも再解釈を進める風潮が生まれた。パスカル・ジャルダンやパトリック・モンディアーノといった作家の登場、ユダヤ人迫害を告発するルイ・マルらの映画、ピエール・ダニーノの歴史教科書批判などが特にそれを表している。97年にはシラク大統領が、ヴェル・デヴ事件と呼ばれるユダヤ人迫害がヴィシー政府の罪であったことを認めているし、左翼のジョスパン首相もヴィシー政府の存在を認めた。98年にはパボン裁判の判決が下ったこともあり、歴史を見直そうとする機運は高まっていると言えるだろう。セリーヌの研究には文体分析や反ユダヤ思想の理論的説明が多いが、特に後期の作品を歴史の文脈においてその価値を再検討するのも必要ではないだろうか。

文 献

セリーヌの作品、書簡集、インタビュー

- Féerie pour une autre fois I* (1952), *Romans IV*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1974.
Féerie pour une autre fois II (1954), *Romans IV*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1974.
D'un château l'autre (1957), *Romans II*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1974.
Nord, (1960), *Romans II*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1974.
Rigodon (1969), *Romans II*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1974.
Version primitive de «D'un château l'autre» in *Romans II*.
Première esquisse de «Féerie pour une autre fois» in *Romans IV*.
Lettres de prison à Lucette Destouches et à Maître Mikkelsen, Gallimard, 1998.
Lettres à son avocat, La Flûte de Pan, 1984.
Céline et l'actualité littéraire 1957-1961, Gallimard, 1976.

その他の研究

- AMOUROUX, Henri, *La Grande histoire des Français sous l'Occupation*, Robert Laffont, 1976
 ARON, Robert, *Histoire de Vichy*, Fayard, 1954.
 AZÉMA, Jean-Pierre, et WIEVIORKA, Olivier, *Vichy 1940-1944*, PERRIN, 2000.
 AZÉMA, Jean-Pierre, *De Munich à la Libération*, Seuil, 1979.
 BECHTEL, Guy, *Laval vingt ans après*, Robert Laffont, 1963.
 BELOT, Robert, *Dialogue de «vaincus»*, Berg, 1999.
 DE BENOIST, Alain, *Céline et l'Allemagne*, Le Bulletin célinien, 1996.
 COURTOIS, Stéphane et WIEVIORKA, Anne, *L'État du monde en 1945*, La Découverte, 1994.

- CRESCIUCCI, Alain, *Les Territoires céliniens*, Aux Amateurs de Livres, 1990.
- DECAUX, Alain, *Morts pour Vichy*, Perrin, 2000.
- GAULTIER-BOISSIERE, Jean, *Histoire de la Guerre 1939-1945*, La Jeune Parque, 1965.
- GIBAUT, François, *Céline, II, et III*, Mercure de France, 1985.
- GUN, Nerin E., *Les secrets des archives américaines : Pétain - Laval - De Gaulle*, Albin Michel, 1979.
- HENRY, Anne, *Céline écrivain*, L'Harmattan, 1994.
- HINDUS, Milton, *L.-F. Céline tel que je l'ai vu*, L'Arche, 1951.
- DE CHAMBRUN, René, *France during the German occupation*, Hoover Institution Press, 1957
- LAVAL, Pierre, *Laval parle*, Cheval ailé, 1948.
- LECOMTE, Bernard et ULANOWSKA, Patrick, *Le Dictionnaire politique du XX^e siècle*, Le Pré aux Clercs, 2000.
- LOISEAUX, Gérard, *La littérature de la défaite et de la collaboration*, Fayard, 1995.
- MORIS, Alain, *Collaboration and Resistance reviewed*, New York et Oxford, BERG, 1992.
- NAUD, Albert, *Pourquoi je n'ai pas défendu Pierre Laval*, Fayard, 1948.
- ORY, Pascal, *Les collaborateurs 1940-1943*, Seuil, 1976,
- PAXTON, Robert O., *La France de Vichy*, traduction de *Vichy France*, Seuil, 1973.
- ROUSSO, Henry, *Le syndrome de Vichy*, Seuil, 1990.
- RYAN, Donna F., *The Holocaust & the Jews of Marseille*, University of Illinois Press, 1996.
- «Vichy, La Résistance, enfin la vérité», *Le Nouvel observateur* (N° 1878), novembre 2000.
- マーチン・ギルバート, 『ホロコースト歴史地図』, 滝川義人訳, 東洋書林, 1995.
- ペーター・プシビルスキ, 『裁かれざるナチス：ニュルンベルク裁判とその後』, 宮野悦義, 稲野強訳, 大月書店, 1981.

注

- 1) *Romans, II*, p. 965.
- 2) «[...] la gare était dans mes fonctions, côté sanitaire, poste de secours, réfugiés... alors forcément, salles d'attente et prostitution ! je devais y voir !... tout voir !» *D'un château l'autre* in *Romans, II*, p. 158.
- 3) «un sacré point de trafic» *Ibid.*, p. 159.
- 4) «[...] sur les rails pareil, trains sur trains... convois infinis... troubadés et troubadés, toutes les armes et tous les peuples... et les prisonniers avec !... déchaussés aussi, pieds pendants hors... assis aux portières... faim aussi ! toujours faim !... [...] Monténégrins, Tchécoslovens, Armée Vlasoff, Balto-Finnois, troubadés des macédoines d'Europe !... des vingt-sept armées !...» *Ibid.*, p. 158.
- 5) «[...] troubadés au piano !... mes filles mères sur d'autres genoux !... la fête continuait ! [...] mes poupées, la joie ! fortes gamelles saucisses patates !... vraie graisse, vrai beurre, vrai plein la lampe !...» *Ibid.*
- 6) «[...] oh, mais qu'ils se remettent à parler ! jacasser la autour tous !... et pas doucement ! ils jugent !... et que les S.A. sont des pires brutes ! et que c'est la fin de tout !... pires anthropophages que les Sénégalais de Strasbourg ! [...] Vive les fifis ! les cris que pousse la foule ! Vives les Russes ! moi là, je vois là, c'est que les ménagères, femmes enceintes, troubadés, fous d'élan, vont se jeter contre les S.A.! charger ! alors que cette fois c'est la gibelotte ! ça sera pas qu'un mort !...» *Ibid.*, p. 168-169.
- 7) «[...] là je peux dire, encore historique, c'est Laval qui a tout sauvé ! s'il était pas survenu, juste, c'était la rafale et c'est tout !... mais heureusement, juste il sortait !...» *Ibid.*, p. 169.

- 8) «De voir Laval et sa femme qu'étaient à parler gentiment, pas fiers du tout, avec toutes et tous, dépassionna net l'émeute !... ils regardaient même plus les tueurs !... ni le mort ! Laval, sa femme, qu'étaient l'intérêt... ils profitaient... l'interroger !... si ça serait bientôt fini ?... si les Allemands gagneraient ? perdraient ?... il devait savoir !... lui ! il devait savoir tout !...» *Ibid.*
- 9) «[...] il était très brave... il haïssait les violences [...] Laval était le conciliant né... le Conciliateur !... et patriote ! et pacifiste !... moi qui vois que des bouchers partout... lui pas ! pas !... pas !...» *Ibid.*
- 10) Anne Henry, *Céline écrivain*, p. 219.
- 11) Alain Cresciucci, *Les Territoires céliniens*, p. 284.
- 12) Bernard Lecomte, Patrick Ulanowska, *Le Dictionnaire politique du XX^e siècle*, p. 29.
- 13) 以下に述べる自発的な対独協力政策以外にも、物資、工業製品の徴発、経済的搾取も多く許し、結果的にドイツを潤すことになっている。
- 14) *La France de Vichy*, p. 110. 著者のバクストンは、アルザス地方の割譲は、アフリカにおけるイギリス領の奪取によって埋め合わせを受けたのだらうとしている。
- 15) *Ibid.*, p. 111. 1940年8月10日、ドイツ大使アーベッツに対して発言している。
- 16) 10月4日に成立した法律によって、外国籍のユダヤ人は収容所などに移され、警察の監視下に置かれた。また同時に公務員、新聞、映画などの職業からユダヤ人が閉め出された。10月7日には移民法が改正され、アルジェリア出身のユダヤ人にフランス国籍が認められなくなった。43年の冬以降はドイツの処刑用収容所に送られるようになる。Donna F. Ryan, *The Holocaust & the Jews of Marseille*, p. 26-27 および Jean-Pierre Azéma, Olivier Wieviorka, *Vichy 1940-1944*, p. 104.
- 17) *La France de Vichy*, p. 193. また *The Holocaust & the Jews of Marseille* によると、ユダヤ人の割合が高いマルセイユでは特に迫害がひどかったようである。
- 18) «Je souhaite la victoire de l'Allemagne parce que, sans elle, le bolchevisme s'installerait partout.» *Le Dictionnaire politique du XX^e siècle*, p. 29. また、*Pétain, Laval, De Gaulle*, p. 204にも、「イギリスが負けることを強く願う」と繰り返し発言していたとある。
- 19) *Ibid.*, p. 208を見ると、ハルはラヴァルとは対照的に、ペタンを信頼しているのがわかる。「Qu'il [Laval] sache que nous sommes au courant de ses manigances. Il perd son temps s'il croit nous entortiller avec ses manœuvres et ses mensonges... En revanche, nous continuons à avoir confiance dans la sagesse du maréchal Pétain.»
- 20) *Ibid.*, p. 209. なお、ラヴァルを罷免したことでペタンの評価は高まったが、フランスに対するドイツの態度が硬化し、特にラヴァルとのつながりが強かった大使アーベッツはペタンに対して脅迫を強めた。その結果ラヴァルは首相として入閣することになり、アメリカは再び失望した。*Ibid.*, p. 211-224.
- 21) «[...] des politiciens présomptueux, fourbes, calculateurs, manipulateurs pour qui la conduite des affaires de l'Etat est une "machinerie".» p. 201.
- 22) 1939年9月1日から45年5月8日までの間に、銃殺あるいは収容所でのガス殺によって殺されたユダヤ人は600万人ほどに上る。犠牲者数がもっとも多かったのがポーランド出身のユダヤ人で、およそ300万人。フランス出身のユダヤ人は83000人だと言われている。マーチン・ギルバート、『ホロコースト歴史地図』(1988)、滝川義人訳、東洋書林、1995。
- 23) *Pétain, Laval, De Gaulle*, p. 202.
- 24) *Laval vingt ans après*, p. 32.
- 25) «Laval est pacifiste jusqu'à la lâcheté, c'est ce qui explique son crime.» *Pourquoi je n'ai pas défendu Laval*, p. 262.
- 26) «Rien ne justifie la guerre, qu'elle soit offensive ou défensive [...] Comptez les morts, a-t-il crié, chiffrez les ruines, appréciez les misères dont l'humanité souffra pendant des siècles peut-être et dites-moi sincèrement si

- tout, vous m'entendez bien, tout n'est pas préférable à une guerre. Je ne la voulais pas, moi, la guerre, à aucun prix, parce que je savais ce qu'elle contenait, gagnée ou perdue.» *Ibid.*, p. 263.
- 27) *Vichy France*, p. 68. また, *Laval, vingt ans après*, p. 127でも, 「ヴェルサイユ条約の耐え難い不正を正すのはフランスの役目だ」*«C'est à la France de proposer que l'on porte remède aux injustices intolérables du Traité de Versailles.»*という発言が取り上げられている。
- 28) *Laval vingt ans après*, p. 126.
- 29) *Vichy France*, p. 68.
- 30) *«Ce pacifisme appatait si fort, si exigeant, qu'il dépassait même chez lui les limites d'une simple politique : une véritable mystique de la paix l'habitait.» Laval vingt ans après*, p. 123.
- 31) *Ibid.*, p.57.
- 32) *Ibid.*, 185 および *Morts pour Vichy*, p. 315.
- 33) *Laval vingt ans après*, p.132. 作者は政治的な不評を恐れての発言だという解釈も出している。
- 34) *Vichy France*, p.132. 「一度ドイツに勝ってもらうことを望むのは, それが我々の利益になるからだ」*«C'est dans notre intérêt que nous souhaitons une victoire allemande.»*また同書, p. 103でも, ドイツが支配する戦後世界では植民地を維持することでフランスの地位を高めるという考えや, イギリスからイラク石油利権を奪う考えがあったことについて触れている。
- 35) *Morts pour Vichy*, p. 310, 315. 主なドイツ積極協力派はデア, ダルナン, ブリノン。主な居眠り派はバタン, ラヴァル, ビシュロンヌ, マリオン。
- 36) *«Ce n'est pas un homme, c'est une burette.»*という風刺画家セネブの言葉。 *Laval vingt ans après*, p. 45.
- 37) ただしこのような態度が必ずしも彼の政治的成功を招いたとは言えない。左派からは保守派に寝返った裏切り者として見られていたし, 保守派からは第三共和制期の政策が一定しなかった元凶と見られた。対外的にも, フーバー大統領, スターリンやヒトラー, そして親しかったはずのムソリーニとも交渉を成功させられなかったという。 *Vichy France*, p.68. (ドイツという国には嫌悪感を持っていたが, ムソリーニのイタリアとは隣人関係を持てるだろうと考えていた。 *Laval vingt ans après*, p.157. しかしムソリーニは36年にヒトラーと協力し, ラヴァルが同盟を結んでいたロシアもその関係を反故にした。 *Céline II*, p. 175-176.) 時代が時代であるだけに外交の難しさは想像もつかないが, それでも首尾一貫しない狡猾な人物という点を強調しすぎるのは避けるべきだろう。
- 38) *Morts pour Vichy*, p. 405も参照。
- 39) 注24を参照。
- 40) *«Céline se souvient de Laval à Sigmaringen et dit qu'à la fin il éprouvait une certaine affection pour lui. Laval aussi, semble-t-il, était pacifiste et patriote.» L.-F. Céline tel que je l'ai vu*, p. 55.
- 41) *«J'ai connu aussi Laval à Sigmaringen. Je ne l'aimais pas. Il ne m'aimait pas, de longue date. Et puis à son contact (je l'ai soigné) je me suis pris de sympathie pour lui. Il avait deux vertus admirables à mes yeux. Il était ennemi absolu de toute violence — ghandiste [sic] à cet égard — et très patriote, fanatique sur ce point, comme moi —» Lettres à son Avocat - 118 lettres inédites à maître Albert Naud*, p. 42.
- 42) *Ibid.*, p. 46 を見ると, セリーヌはラヴァル裁判の記録を綴ったノーの著作を誉めている。
- 43) *«Naud est bien gentil, mais pas très sérieux (entre nous). Mon autre défenseur, Tixier-Vignancour, 95, boulevard Raspail, a beaucoup plus (il me semble) de cran, de mordant, de bouteille.»*1948年11月16日, P. モニエへの手紙。 *Céline, III*, p. 201.
- 44) *«Depuis son procès Laval ce n'est plus un homme c'est une actrice ! Et il veut être seul en scène !» Ibid.*, p. 218.
- 45) セリーヌはノーに対してと同様, ミケルセンに対してもその人格や能力を十分信頼できずにいたのでほと考えられる節がある。デンマーク滞在中の48年から, セリーヌはスウェーデン人作家エルンスト・

ベンツと面識を持っており、恩赦を受ける時期まで手紙のやりとりを続けていた。それによると、「ミケルセンは楽観主義者で〔……〕フランスの伝統のことをよく知らない、全くわかってない。イギリス式の楽観主義でしか物事を見ようとしない。お人好しのやり方だ!」〔スカンディナヴィア語で書かれたベンツの本について〕ミケルセンに内容を教えてもらおうと思うが、しかしミックは鈍感なピエロだからノノ (*l'Herne*, p. 148-149.) などと語っている。エルンスト・ベンツはイエーテボリのアリアンス・フランセーズ館長で、セリーヌがフランスに送致されないようフランス領事官ノルディングに働きかけてくれた人物であるため、セリーヌからの信頼は篤かったと思われる。

- 46) *Morts pour Vichy*, p. 309.
- 47) *Céline*, III, p. 251. ジョゼ・ラヴァルとの関係で知られていることは多くないが、はっきり確認されているエピソードもある。それは、ドイツ大使館法律顧問カール・ウィリアム・フォン・ボーゼの家に招かれた際、ジョゼの仲介で、セリーヌは後に親友となるアルレッティを紹介されたというものだ。 *Céline et l'Allemagne*, p. 27.
- 48) *Ibid.*, p. 18.
- 49) «Qui voulait de moi nulle part ? j'avais demandé la Suisse — Laval — REFUSÉ —» *Ibid.*, p. 19.
- 50) «Que les foudres de la Justice française ne se dirigent-elles point vers la Suisse — où sont réfugiés ROCHAT ambassadeur, chef du cabinet diplomatique de Pétain, PAUL MORAND, ambassadeur de Pétain, JARDIN, chef du cabinet de Laval, etc. etc. Tous ces mons devraient intéresser l'effréné Charbonnière. Mais Charbonnière est moins bête qu'on le pense — il songe aussi à l'avenir ! De Céline rien à craindre, alors !» *Lettres de prison à Lucette Destouches et à Maître Mikkelsen*, p. 253. (強調は原著者)
- 51) «Il n'a jamais été lancé de mandat d'arrêt contre Paul Morand 2 fois ambassadeur de Pétain et auteur de livres assez gratinés et même antisémites pendant l'occupation [...]» *Lettres à son avocat*, p. 175. (強調は原著者)
- 52) «Je suis là Monsieur le Président absolument par votre faute ! vous qu'avez formellement refusé de me caser ailleurs ! vous le pouviez ! parfaitement !» *Romans*, II, p. 239.
- 53) «L'Époque a besoin de coupables, cela suffit. J'étais «suspect» cela suffit. Tout suffit. [...] Toute la France a collaboré ! Varenne a gagné par exemple des centaines de millions à fabriquer des munitions et des aérodromes pour l'armée allemande *au su et au vu de tous* !» *Lettres de prison à Lucette Destouches et à Maître Mikkelsen*, p. 286. (強調は原著者)
- 54) *Céline*, II, p. 261.
- 55) «[...] moi je n'ai que des dettes — pour en finir moi et les bêtes c'est une question de cyanure bien pur et sec... pas à la "Laval" ! Ce juif abusif!» *Céline*, III, p. 330. なお『城から城』でセリーヌは、ラヴァルに青酸カリを渡したのは自分であると言っている。真偽はわかっていないが、この無駄遣いという発言を見るとその信憑性が高まるとは言えよう。
- 56) *Romans*, II, p. 238での«bicot torve» (厳つい顔のアラブ野郎) など。また、p. 174では子供の頃母の店を見た、買収を持ちかけにやってきた混血の人たちが、ラヴァルと同じように「アジア人の黒い髪」「濃い褐色の肌」だったと記述している。
- 57) «À Chateldon même, les camarades de son âge se moquèrent vite de son apparence physique. Il paraît être d'une race différente, nullement auvergnate. À cause de son aspect exotique, on l'appelle le «jamaïck», ce qui le fait entrer dans d'épouvantables colères. / Plus tard, au cours de sa carrière, les malveillants tireront aussi parti de cet aspect de sa physionomie, certains même (dont Maurras) lui lançait l'épithète, infâmante à l'époque, de «juif».» *Laval vingt ans après*, p. 21.
- 58) «Aller tuer des bolcheviks pour faire plaisir à la famille Laval m'a toujours semblé monstrueux et je l'ai toujours dit.» *Céline*, II, p. 341.

- 59) «[...] les Antiques meurent emmerdement... la preuve : le bachot, la morale !... tout le monde convient, sauf frère François et Pierre Laval !...» *Féerie pour une autre fois* I, in *Romans*, IV, p. 119.
- 60) «Le monde en pourrit, notre terre est limon de larmes, boue à chagrins, cinq cent millions de paires d'yeux qu'arrêtent plus, petits ruisselets, fleuves, cascades, lacs de larmes de Buchenwald en [un nom illisible], des forts de Montrouge à Noé, passant par Mornet rouge de sang [...]» Version C de «Féerie pour une autre fois», in *Romans*, IV, p. 879.
- 61) «Ah, ils ont pas voulu l'entendre, Mornet C* ?... ils ont préféré le fusiller !... ils ont eu tort !... il avait à dire...» *Romans*, II, p. 238.
- 62) 前述のエルンスト・ベンツやフランス領事官ノルディングに対しても、セリーヌは戦後の肅正やレジスタンス側の振る舞いについて強い批判的な気持ちを打ち明けている。対独協力者の肅正を«la corrida aux collaborateurs»と呼んでその残酷さを強調したり (*l'Herne*, p. 159), 1382年のマヨタンの蜂起, ナントの勅令の廃止, サン・バルテルミの虐殺を例に挙げ, フランスにおける政治的事件は伝統的に残酷なものだった, そして今恩赦が行われているらしいが, これはレジスタンスを批判する者をなくすためであり, それゆえレジスタンス側の行う詐欺であるという考えを述べたりしている。自分が恩赦を受けた後もまだ憎しみは残っていると書いている (*l'Herne*, p. 147, 151, 153)。
- 63) Appendice I, «Fragment d'une version primitive», in *Romans*, II, p. 1022を参照。
- 64) Notice, *Ibid.*, p. 97の注1を参照。
- 65) «Il était sincèrement affable, il affectait pas... je l'ai vu dans la rue à Siegmaringen aider des gens dans la peine, des vraiment pauvres gens à trimballer leur barda, leurs sacs et leurs loques...» *Ibid.*, p. 1039.
- 66) *Ibid.*, p. 991.
- 67) «Je vous parlais de Laval, du petit incident... les voilà qui se mettent à hurler tous les trois... oui ! oui ! à hurler !... la femme de chambre, le sergent, Laval... pas qu'ils se disputent... mais d'hausser la voix à cause des tonnerres des avions, que les vitres tremblent vibrent à péter... “Dites, dites”, crie Laval... “Le veau a tourné” “Le veau ?” “Le poulet aussi” “Oui ! oui ! tout !”... ah je comprends... ils ont gueulé d'une façon que j'ai tout de même entendu... je savais qu'il avait des quartiers de veau sous ses fenêtres... une réserve de viande... tout le monde le savait au Château, et tout Siegmaringen aussi, les réfugiés... elle venait lui apprendre que toute la viande avait tourné, soudain là... [...] Il prenait pas ça bien du tout que ses viandes aient tourné subit sous ses fenêtres !... lui qu'était plutôt bien élevé... on peut dire il s'encolérait !... il tapait du poing !... oui ! du poing ! et il tréignait !... il me regardait mal, et le sergent aussi et la bonne... / «Eh bien ! eh bien !» / Pour un peu il me soupçonnait, moi !... moi !... ja savais pas où elles étaient exactement ces viandes !» *Ibid.*, p. 1049.
- 68) «“Docteur ! Docteur ! dans ce château je n'ai que des ennemis ! Approchez-vous !... là-haut !”... Il me fait signe “là-haut”... là-haut c'est le maréchal... tout le sixième étage... / “Au fond !” / Au fond c'est Brinon... / “Et là ! Et là !” / Il me pointait du poing... où c'est “là, là, là” je comprends qu'il s'agit de Darnad... de Déat aussi... d'Abetz sans doute... d'Hoffmann... de Boemelbourg... / “Et dans le bourg, vous le connaissez ? / — Oh, non... / — Tous, Docteur, tous ! / — Vous croyez ? / — Mais je me fous d'eux ! je me fous d'eux ! je me fous d'eux ! Vous m'entendez bien Docteur ! Ils peuvent venir m'empoisonner... tous ! tous !”» *Ibid.*, p. 1049-1050.
- 69) «— Eh bien Docteur je vais vous dire, je me soigne moi-même depuis trente ans ! / Vous vous soignez mal !... vous mangez dix fois trop de viande ! / — Et vous ? / — Nous, nous crevons de faim, et ça vous est bien égal ! mille qui crevons de faim à Siegmaringen, mille qui demeurons pas au Château ! vos victimes monsieur le Président ! et des enfants et des vieillards, et couverts de gale, monsieur le Président...» *Ibid.*, p. 1041.

- 70) *Ibid.*
- 71) «[...] il fumait quatre paquets par jour... il avait pas à se gêner à fumer devant moi... quand d'autres personnes entraient le voir, il fumait plus, il s'en allait... il aimait mieux s'en aller que d'offrir une cigarette...» *Ibid.*, p. 1037.
- 72) «[...] ce qu'est certain c'est qu'ils fournissaient Laval, pas en gardénal, en Lucky Strike !... alors, quelque chose ! on sait comment Laval fumait ! et comment aussi il râlait qu'on en profitait pour l'écorcher ! que ses «passeurs» abusait... moi ce qu'il aimait bien chez moi c'est que je fumais pas... il était pas gêné de fumer devant moi... tout patriote qu'il était je crois qu'il aurait bien fourgué un Département pour une cigarette... jamais il offrait... il voulait fumer tout seul, absolument seul...» *Ibid.*, p. 1024.
- 73) «[...] il est assez content de moi... j'écoute pas mal... et puis surtout, je suis pas fumeur !... fumant pas, il aura jamais à m'offrir... il peut me montrer tous ses paquets, deux gros tiroirs pleins de "Lucky Strike"... vous le tapez d'une cigarette, il vous revoyait plus !... jamais !... ou seulement du feu !... une allumette ! / "Les Anglais vous ont tout offert, Monsieur le Président ? / — Ils m'ont supplié !... absolument tout, Docteur !"» *Ibid.*, p. 238.
- 74) «[...] — Vous savez monsieur le Président, on dit tellement de choses !... / — On dit ? On dit quoi ?... que je suis vendu aux Allemands ? On dit aussi que je suis juif, n'est-ce pas ? » / Entre moi Laval y avait un petit compte... il aurait bien dit un petit mot pour que les Fritz m'expédient plus loin que Buchenwald... il y avait toujours pensé... Qu'il avait la tronche sémitique, n'importe qui pouvait le voir, cette bonne blague !... l'air aussi youtre au moins que Mauriac ou Tartre... Quel mal à ça ? [...] j'avait parlé d'un certain livre de propagande pour ses électeurs à Aubervilliers où Xavier Privat mettait les points sur les i... il s'agissait alors de plaire aux électeurs d'Aubervilliers... Xavier Privat faisait valoir son charme oriental, son regard oriental... il renait ce charme de sa mère, d'après Xavier... Mauriac a le même regard, presque oriental... Mauriac lui en plus sensuel... Laval comme passé au noir, mais la même lourdeur de regard... Valentino, Loyola, Abd el Krim... Quand on est blond et à yeux clairs, on se voit bien près d'être enculé par de telle personnes... cet énormément lourd regard vous met en défense...» *Ibid.*, p. 1036.
- 75) «"Vous m'avez bien traité de juif, n'est-ce pas Docteur ? oui, je le sais !... pas que vous ! Je suis partout aussi ! / — Eux, pas tout à fait, Monsieur le Président !... / — Ah, vous me faites plaisir ! vous me le dites en face !" / Il s'esclaffe... il est pas méchant... mais il m'a pas pris en traître, je savais ce qui devait m'arriver... fatal !... / "Mais vous l'avez écrit vous-même !... / — Oh, c'était pour mes électeurs !... pour Aubervilliers ! ... »» *Ibid.*, p. 239.
- 76) «Je dois dire, question de la L.V.F., Laval on se souvient peut-être avait payé de sa personne... un patriote l'avait mouché, raté de très près... une balle... pour ça qu'il demandait à me voir, il souffrait toujours du poumon, et du foie aussi...» *Ibid.*, p. 1037.
- 77) ヴェルサイユのボルニ＝デボルド Borgnis-Desbordes の兵舎で 8 月 27 日 18 時頃に起こった事件。コレットの撃った弾丸 5 発のうち、一発がラヴァルの右腕に、もう一発が心臓付近に当たった。コレットはかつてド・ラ・ロック大佐のフランス社会党に属していたが、この時点では背後関係を持たない単独犯だったようだ。しかし当時は事件の黒幕に関してさまざまな憶測が流れた。*Histoire de la Guerre 1939-1945*, p.127-129.
- 78) «Il connaissait les attentats, il avait eu le même à Versailles, pas au pour, au vrai, radios... il souffrait toujours de la balle... il était très brave... il haïssait les violences, pas pour lui, comme moi, que c'est décourageant, ignoble...» *D'un château l'autre*, in *Romans II*, p. 169.
- 79) «j'en ai pas vu un de tous d'ailleurs, de tous les gâtés du Château, sauf Marion, qu'on ait pu dire qu'avait du cœur... égoïstes tous, féroces... pareils que le Gaston ou le Loucoum, que le de Gaulle ou le Dulles,

Staline ou Musso... animaux tous pas plus voilà...」 *Ibid.*, p. 1022.

80) *Ibid.*, p. 1038 参照。

81) 1952年の *Féerie pour une autre fois I* では、ラヴァルに関して次のような記述がある。架空の読者のセリフとして、「あなた〔セリーヌ〕はすぐ殺されてしまうでしょう！もしちょっとでも『大西洋の壁〔連合軍のフランス上陸を阻むためドイツが大西洋沿岸に構築した壁〕』を作っていたり……飛行場を2, 3ヶ所作っていたりしたらラヴァルに助けを借りることもできるでしょうが……でも実際は何も売り渡したりはしなかったですからね！〔……〕誰も助けてくれないでしょう！（*Roman IV*, p.67.）」ここで「ラヴァルに助けを借りることもできる *«vous pourriez invoquer Laval»*」となっている箇所は、草稿では「ヒトラーに助けを借りることもできる」となっていた。この箇所はいくつかの点で興味深い。ドイツに軍事的協力をしていたらヒトラーに擁護してもらえるというのは理屈としては合っているが、ヒトラーがすでに死んでいる時代の言葉と見ると全く現実的でない。そしてもちろん、ヒトラーに助けをもらえるというのは冗談で言うにしてもあまりに不謹慎で、自分の立場を悪くする発言になるだろう。そこで誰か代わりの擁護者をと考えたときに頭に浮かんだのがラヴァルだった。戦争後期のラヴァルには積極的な対独協力を行う実権も意欲もなかった（たとえば *Morts pour Vichy*, p. 314 では、ジクマリンゲンに移って以来ラヴァルは政治的活動にはいっさい参加しなかったとされている）ことを考えると、ドイツに協力していたらラヴァルに助けをもらえていたという発想は、ヒトラーに助けをもらうと言うのに比べるとかなり無理がある。しかしそれでもあえて決定稿でラヴァルの名を残したのは、『城から城』執筆前までのセリーヌがラヴァルを実際以上に負のイメージで、戦争犯罪者というイメージでとらえていたからではないか。そしてまた、それを公言するのは自分自身が対独協力していなかったという事実を強調する手段にもなっており、『城から城』でのラヴァルの扱いと大きく違っている。

82) *La Mode rétro*, p.9. De Gaulle, *Discours et messages I, II* も参照。

83) 戦後ヨーロッパの中で高い地位を占めるため、植民地を拡大する努力もなされた。 *Vichy France* 参照。

84) «Je suis l'objet d'une sorte d'interdit depuis un certain nombre d'années, et, en faisant paraître un ouvrage qui est malgré tout assez public, puisqu'il parle de faits bien connus, et qui intéressent tout de même les Français, — puisque c'est [...] une petite partie de l'histoire de France : je parle de Pétain, je parle de Laval, je parle de Sigmaringen [...]», «Entretien avec Albert Zbinden», in *Romans, II*, p. 937-937.

85) フランスの著名な政治家を描くことだけでなく、ドイツが戦争に敗北し崩壊してゆく過程をドイツ国内にいた者の立場から描くことも、当時の読者の興味を大いにひくと考えただろう。このような記録を残すことができるのもセリーヌの状況が特異なものだったからこそだ。実際、友人のヴィルフォスはコペンハーゲン滞在中のセリーヌを訪れて、「Mais c'est toi, Ferdinand, qui devrais reprendre la plume du *Voyage pour nous faire assister à l'effondrement de l'Allemagne ! il n'y a que toi de valable qui aies vu cela de l'autre côté... Quel bouquin extraordinaire, la débâcle du nazisme. Et tu en es sorti...*」と語っている。この題材なら成功に結びつくと考えるのは自然な感覚であり、セリーヌももちろんこのことに気づいていただろう。

86) ところで亡命三部作は実際のセリーヌの体験をもとにして書かれた小説群だが、三部作で扱っている出来事の時系列的な順序は現実のそれと異なっている。小説では、移動順序に関する矛盾もいくつかあって理解しにくいのが、フランスを脱出したセリーヌはジクマリンゲン（ジークマリンゲン）、バーデンバーデン、ベルリン、ノイルツピン、再びジクマリンゲンを経てデンマークへ向かうという順序になっている。しかし現実には、バーデンバーデンからベルリン、ノイルツピン、ジクマリンゲンへと移動したことになる。このように現実と小説とで食い違いがある理由について、三部作が「『自然な』論理の範囲内で語ることの不可能性」そのものを扱っているからだと言えよう。フィリップ・ミュレは言う。しかしクレシウッチの言うとおり、セリーヌが大衆に訴えやすい題材を最初に持ってきたために『城から城』の舞台としてジクマリンゲンを選んだというのも大きな理由の一つと考えるべきだろう。 Cresciucci,

Les territoires céliniens, p. 257-258 参照。

- 87) *Romans*, II, p. 1020.
- 88) 『人文知の新たな総合に向けて』(21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第二回報告書IV〔文学編1 論文〕), 京都大学大学院文学研究科編, 2004年, p. 307-318.
- 89) *Le syndrome de Vichy*, p. 90. また休戦協定が結ばれた5月8日はそれまで祝日だったが, ド・ゴールは5月の第2日曜日を祝日に変更している。これは連合軍全体がドイツに勝利した日であるため, 連合軍の勝利の価値を下げる, ひいては相対的にフランスのレジスタンスの価値を高める象徴的な意味合いがあった。*Ibid.*, p.89-90.
- 90) *Ibid.*, p. 90-92.
- 91) *La Mode rétro*, p. 33.
- 92) 70年代に入ると「la mode rétro」と呼ばれる回顧運動が起こって, レジスタンス神話の否定がさらに進む。映画『リュシアン青春』などがきっかけとなった。
- 93) セリーヌ同様ルパテは大戦末期ジクマリゲンに避難しており, そこでカール・エプティングが組織した「フランス精神保護委員会」に参加していた。*Céline et l'Allemagne*, p. 56.
- 94) *La Mode rétro*, p. 24 ; *Histoire égoïste*, p. 271.
- 95) *La Mode rétro*, p. 24.
- 96) «Tous ces gens ne sont plus que des employés — Ils n'ont plus d'opinion personnelle — C'est à leur patron qu'il faut s'adresser pour parler sérieusement — où est leur patron à tous ? A Vichy ? A Berlin ? je ne sais pas — La foutue damnée rage qu'ils ont tous de me ranger dans leur propre catégorie de salariés ! «sur le même plan — Hé là !» Cela me révolte — Je suis libre foutre sang ! Amateur ! et non professionnel «je n'ai aucun anneau» J'emmerde Hitler ! j'emmerde Pétain ! j'emmerde Laval ! et je l'ai dit si haut «un peu partout» qu'il est bien question que l'on m'arrête [...]» 1^{re} esquisse de «Féerie pour une autre fois», in *Romans*, IV, p. 568. なおこの引用最後の部分, 「あまりに大声で〔……〕なってしまった」というのは, 自分が糾弾されている本当の理由を(知ってはいても)隠し, 他の理由とすり替えているのだと考えるべきだろう。
- 97) *Lettres à son Avocat*, p. 107.
- 98) *Céline II*, p. 254.
- 99) 経済的な困窮が主な理由で, 作家として再び成功する必要があったため。
- 100) *Lettres à son Avocat*, p. 136.
- 101) *Lettres à son Avocat*, p. 181.
- 102) *Les Collaborateurs*, p. 9.
- 103) これは次のような場面である。閣僚そろっての散歩中, イギリス空軍の空襲を受け, 全員が橋の下へ隠れる。攻撃で今にも橋が崩れてしまいそうなので早く居城へ帰ろうとみな考えるが, 恐怖で誰も動けない。そのとき, ベタンが次のような行動をとる。「[...] au moment là vraiment tragique Pétain qu'avait encore rien dit... l'a dit !... “En avant !” et montré où il voulait ! “En avant” !... sa canne ! “En avant !” qu'on sorte tous de dessous l'arche ! qu'on le suive ! “En avant !” que ça reculotte !... “En avant !”...»そして自分から率先して橋の下を離れる。「[...] lui-même avec Debeny, dehors ! oh, sans aucune hâte... très digne ! direction : le Château !...» *Roman II*, p. 134. こうしてみな無事に城に到着して難を逃れるのである。この場面は小説中もっとも有名な場面の一つで, たとえばドノエル社顧問だったドワイヨンも, ビシュロンヌの葬儀のために閣僚が特別列車でホーエンリンヒェンへ向かう場面, セーヌ河畔での幻想の場面とともに「フランス語にとって誇りであると言ってよいページだ (*Les Livrets du Mandarin*; octobre 1963, *Bulletin célinien*, n° 249に再掲)」と述べている。ところで、『城から城』ではベタンの名はラヴァルほど頻繁には見られない。そして実際にベタンが登場する重要なエピソードとしては, この

ペタンが散歩中に閣僚を救うというものだけである。なぜ小説全体でペタンに関する記述が少ないのか。親族が個人的な知己だったラヴァルの場合と違って、セリーヌはペタンとほとんど面識がなかったと考えられる。そのため、リアリティをもって人物を描くことが難しかったのではないだろうか。確かにセリーヌはアルベール・バラーズに受けたインタビューで、「[...] j'ai vu Laval et Pétain, pas en photographie, pas en alexandrins de Racine, mais comme ils étaient, avec leur viande traquée, c'est du vrai portrait.» (C'est-à-dire, n° 8, juillet 1957; *Céline et l'actualité littéraire 1957-1961*, p. 58に再掲)のように、実際に会ったことがあると語っている。しかしこの時期のインタビューは『城から城』宣伝の意味もあって受けていたため、内容が読者の興味をひくように誇張されていた可能性もある。しかもこの9年前の1948年には、ヒンダスへの手紙で«Je n'ai jamais soigné Pétain, je ne l'ai jamais vu à Sigmaringen — (ni ailleurs !) [...] Pétain n'avait aucun contact avec les autres émigrés français, qu'il vivait au château de Sigmaringen — reclus — invisible.» (*l'Herne*, p. 138)のように、ペタンとは会ったこともないし、そもそもペタンは一般の避難民に姿を見せなかったとしている。手紙の年代を考えると戦争犯罪者としての嫌疑が極力かからないようにするための発言だったかとも思われるが、しかし歴史家のアラン・ドゥコーもジクマリンゲンではペタンは人との接触を避けていたとしており (*Morts pour Vichy*, p. 315などを参照)、このセリーヌの言葉にも信憑性がある。ドゥコーはまた、車の所持が許可されていなかったラヴァルと異なり、ペタンはいつも車で外出しており、徒歩で散歩中のラヴァルと車ですれ違ったりしていたと書いている。そのためペタンが閣僚を引き連れて散歩したというこのエピソードも、空襲を受けたという部分も含めセリーヌの想像力の産物である可能性が高いと考えられる。以上の点を鑑みると、あえてこのような架空のエピソードを作り出したのは、やはりペタンを称揚したいという意図があったからこそではないだろうか (ドゥコーによると、ラヴァルの一行がヴィシーからジクマリンゲンへ移動する途中、戦闘機による空襲を受け、同行の者がラヴァル夫人を間一髪のところ助けたという出来事はあったらしい。そのためセリーヌがこの話をラヴァルから聞いて、そこから閣僚襲撃のエピソードを思いついたという可能性もある。だがいずれにせよ重要な役割をペタンに割り当てたという点では、セリーヌの意図は同様に表されてることになるだろう。 *Morts pour Vichy*, p. 308参照)。

104) *Romans, II*, p. 1015 参照。同書, p. 235-236 に当たる部分が掲載された。